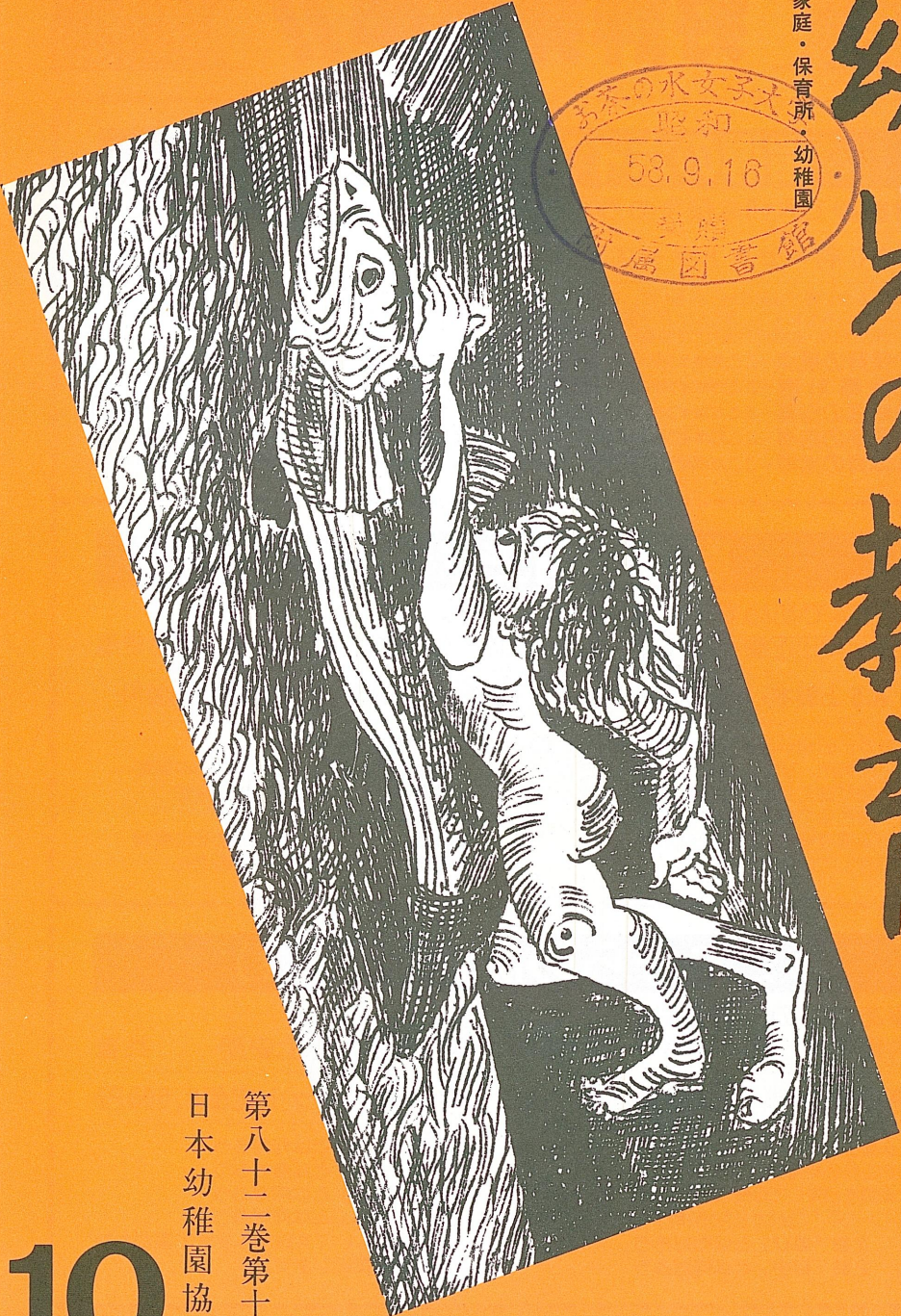


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第八十二卷第十号
日本幼稚園協会

10

好評発売中!!

幼児をのぼす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

●微妙で大切な保育の坎どころを、がっちりと読みとろう!

B6判・セットケース入り・平均208頁・セット定価9,600円

子どもたちに豊かな保育をと心をくだいておられる先生や、子どもがよくわからない、きつかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| ①保育の視点—ここがポイント 海 卓子・著 | ⑥自然の指導—ここがポイント 小山孝子・著 |
| ②指導計画—ここがポイント 高杉自子・著 | ⑦ことばの指導—ここがポイント 阿部明子・著 |
| ③絵画の指導—ここがポイント 林 健造・著 | ⑧ごっこ遊び—ここがポイント 笠間典美・著 |
| ④音楽の指導—ここがポイント 早川史郎・著 | ⑨園行事—ここがポイント 仲田あつ子・著 |
| ⑤体育の指導—ここがポイント 三宅邦夫・著 | ⑩母親対応—ここがポイント 本吉圓子・著 |

戦後保育史 (全2巻)

●日本で初めての生きた保育史です。

編纂/岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・穴戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗

A5上製本・1巻580頁・2巻512頁・各巻ケース入り・セット定価9,800円

戦後から昭和51年までの保育界の流れを幼稚園、保育所、幼児文化の三つの側面からとらえた我が国で初めての戦後保育史です。文部省、厚生省の施策や保育カリキュラム、文化財の変遷等豊富な資料と証言をドキュメントで紹介しています。

第1巻(昭和20年~37年)

幼稚園とその保育 保育所とその保育
幼稚園と保育所の関連 学術文化

第2巻(昭和38年~51年)

幼稚園とその保育 保育所とその保育
幼稚園と保育所の関連 学術文化

これからの保育 (全6巻)

●あなたの保育を深め充実させます。

大場牧夫・海 卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗 共著

A5軽装判・各256頁・セットケース入り・セット定価9,600円

「保育」を原点にもどして考え直し、子どもたちの自主性の発達を助けたい。自由で生き生きとした保育を目指して保育者自らも高まりたい。

シリーズ「これからの保育」は、

1巻「遊び」とは何だろう

2巻「自由」とは何だろう

3巻「課題」とは何だろう

4巻「生活」とは何だろう

5巻「集団」とは何だろう

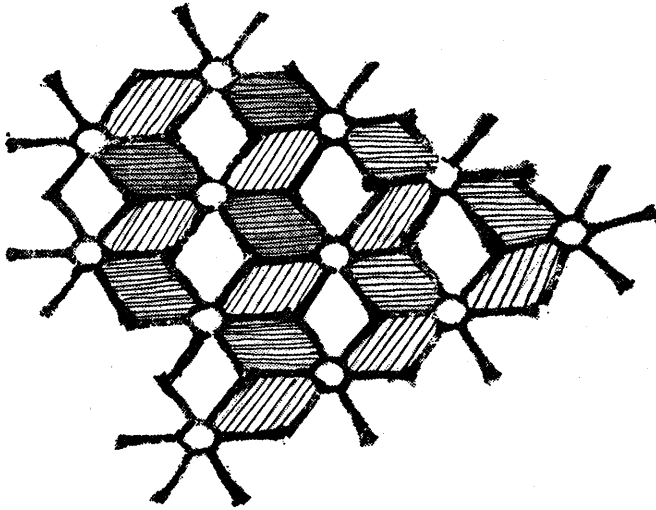
6巻「総合」とは何だろう

という命題について実践をふまえて重ねた討論から問題を提起します。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十二卷 第十号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第八十二卷 十月号 —

© 1983

日本幼稚園協会

時の歩みによせて……………高橋さやか……………(4)

朝に思う……………津守 真……………(6)

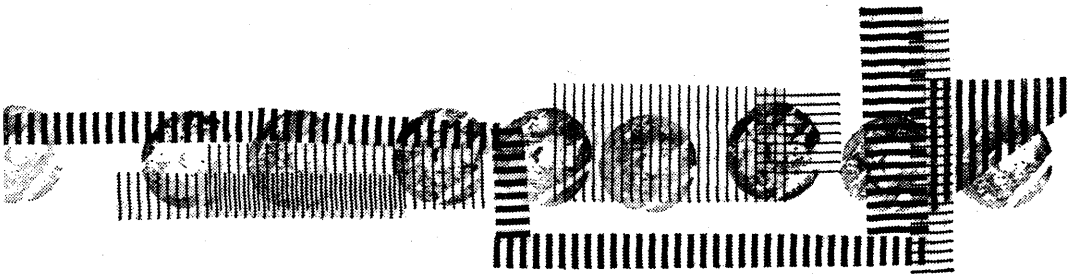
家庭幼稚園のこと……………東 喜代雄……………(10)

秋の一日 大自然の中のおにぎりの味……………佐々木和子……………(18)

秋の詩 母・子・友……………河井多喜子……………(22)

私の本棚……………向山陽子……………(25)

近代短歌に現われた子ども (十三)……………大塚雅彦……………(28)



エリックソンと幼児教育(最終回)……………仁科 弥生…(36)
昔の味……………福田 理恵…(46)

ニュージーランドにおける就学前教育の

歴史ならびに現状(二)……………松川 由紀子…(48)

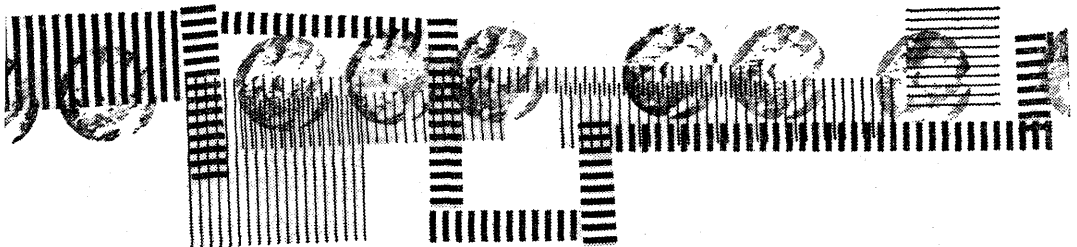
★倉橋賞受賞研究

四歳児における動物あそびの生態

——動物あそびの発生・分化・変容の分析——

……………宇田 真由美…(56)

表紙 紙 織茂 恭子
表紙題字 比田井 和子
カット 福田 理恵



時の歩みによせて

高橋さやか

春、また新学期がはじまる、新年度が明けた、と思つたのは、つい昨日か一昨日、という気がするのに、梅雨——日本の雨季に入り、すぐに夏となり、また秋となり、冬が来る。冬に入ればまた一つ年が重なり、次の年度が明けるのもまたたく間である。

何をしたのだから、何をするひまもなかった、と思となは思う、……恐らく、そう思うおとなは少くはないといえるのではないだろうか。

しかし、子どもは、すべての子どもが確実に一年たてば一年分の成長を遂げている。よくか、悪くか、プラスの方向にかマイナスの方向にか、いずれにしろ、子どもは一人一人それぞれに「自分」を築き人格上の実績をつみ重ねる（重ねた）のである。

おとなになつてからの時の歩みは、一人一人のおと

なにとつて停滞することも珍らしくないし、なかったに等しい場合だってあり得るようである。しかし、子どもにとっては一刻一刻、常に常にかが加わり、変化し、彫り込まれ、型づけられるのである。子ども——成長期の人間にとつて、不断に移る時は決して無になることはない。必ず、よくか悪くか、正常か異常か、健康か病弱か、順調か障害を負うか、……等々の実績を組み成しつづけるのである。ある意味で、社会そのものの実態も、子どもと同様である。社会の様相は、やはり不断に時と共に移り動いており、状況は、昨日と今日とではもう同じではない。

とすれば、おとなになつてしまった人間は時代（社会）からも子どもからもとりのこされる、とみとめざるを得ない。いや、おとなとても状況——時代・社会

に属さざるを得ない存在なのだから、状況によって始
終変りつづけているに違ひはないのだが、様々のもの
ごとについて意識的な生活をしているにもかかわら
ず、自分をも包括している状況の移り変りを意識に捉
えることができないでいるわけで、結局、時代にも子
どもにもついてゆけない結果を招いてしまう。自分と
自分のおかれている状況について、自覚のもてないお
となほどなさけないものはない。

子どもが成長の段階を一つ一つ、不断の学習と、学
習の総括としての遊びと、それらによって獲得した実
力に応じた成果をあげるしごと（仕事）と、この三者
を綜合して自ら充足し達成してゆくのに、おとなはそ
れにまともにかかわろうとはしていないのではない
か。子どもが成長の段階をふみ上る途中で、挫折した
り歪曲されたり破綻を来したりするのは、やはり、無
為無力なおとなのせいである。子どもにも時代・社会
にもついてゆけず、そういう自分に対する自覚も自省
もないおとなのせいである。

このごろの、教育にかかわる権威ありげな諸方面の
コメントは、恐しくもまたしらじらしい。ことに、道
徳の昂揚とか、権威の尊重、鍛錬主義の正当性・効用
など、ことごとしく評価されるのは恐しい。

本当に大切なのは、人間が人間らしく、よいかかわ
りを求めつづけ、それをもつことに努力しつづけるこ
とにほかならない。

移り動く時の歩みにそのまま即して成長している子
どもにかかわるなら、子どもとともに時の歩みに即し
て歩まなければならぬ。その時その時に、子どもが
何を感じ何をうけとめ何を学び何を通過させたか、う
ちに残したものは何か、なお求めているものは何か。
失ったものは何か。……それを共に感じうけとめ学び
通過させ、残しかつ求め、そして失ったものをも認め
ている、そのように子どもにかかわっているなら、私
たちは子どもとともに確かに時を所有し時を重ねるこ
とを得る——そのようにしてはじめて私たちは、教育
に与ったといえるのである。

（西南女学院）

朝に思う



津 守 真

保育の現場に出る日日、私は、朝、銀杏の並木道を歩きながら、日ごとに変化する葉の色や、日によってことなる雲の形姿を見ている。それとともに、まもなくたしかにはじまるこの日のことを考えている。何が起るか、何をするかという対象的側面を考へることもあるが、それ以前に、私自身が積極的に保育の現場にはいつてゆくことができるように、内心の戦いをしていると言ってもよい。このことは生

来の保育者にはわかりにくいことらしいが、私にとっては真剣な作業である。

数日前、私は、Giorgi, A.: Psychology as a Human Science: A Phenomenologically Based Approach を、夜おそくまでかかって読んだ。著者は、ヴァント以来の心理学の歴史を概観し、自然科学の方法にかかわる、客観的事実、実証主義、数量化、因果論、決定論、予測性等の方法が、人間を研究す

る学問に適切か否かを吟味する。その批判に立つて、研究者から切り離された対象として人間を見るのではなく、共に生きる人間として、相互性の中で見る心理学を提唱する。外的観察者の観点からは、行動は可視的であり、経験は不可視的であるが、内的行為者の観点からは、経験が可視的であって、行動は不可視のものとなること、数量化された行動よりも、表現としての行動の質的側面に着目することなど、私が十数年来くり返し述べてきたのと同方向の論である。ところが、このような現象学的観点から理論的書物を書いている著者たちは、ほとんどが子どもの現場で仕事をしている人でないのは不思議である。また、逆に、生きた子どもの仕事をしているはずの人が、そこから得られる自分の見識をすて、機械論的説明に頼ろうとする傾向があるのも不思議である。

考えてみると、生の現象にみちている保育の現場の中から、人間の学問をつくり出そうとする試み

は、意外と、前人未踏の分野なのである。保育者が現場に身を浸して獲得する直接体験は、まさに人間の本質にふれている。保育の現場にはいつて一日を過すことは、実践的にも研究的にも大きな価値があることをあらためて認識したとき、私は身体的には疲労を感じていたけれども、この日はことに積極的に現場に向うことができた。

現場に出ると、次々にいろいろのことが起り、一日が夢中のうちに過ぎることが多いので、次の日がくるまで、朝のひとときの重要さを考えるゆとりはめったにない。そして、翌朝がきて、また同じように道を歩きながら、子どもとの生活に自分が積極的になれるように、心を向け直す。このときから保育の一日が始まっていることを、私は次第にはっきりと認識するようになってきている。

*

*

朝、子どもたちが、ひとりひとり、親と共に門からはいつてくるとき、それぞれの過去も未来も、このひとときの姿に凝縮しているように思えて、たとえ互いに声をかけあわないほど離れていても、この一瞬を通じて、運命的なつながりを感じさせられる。

養護学校という場所にくるまでには、親子とも、遍歴し、傷つき、さまざまな悩みを経験している。子どもの保育を担当するおとなたちも、皆、それぞれの人生の中で、この子たちとの偶然の出会いを自らの選択との間に揺れ動きつつ、ここに集まっている。ことしは、私も、ここに到達するまでに、葛藤と決断と、それに伴う動揺の時期を経ねばならな

ったので、一見平和な風景の中にも、さまざまな実人生が秘められていることを思った。

大学から現場に、実際に身柄が移ったことによつて、わかったことがいくつかある。

四月、新学期、第一日目、子どもたちが私に向つていままでよりもっと親しげに近寄ってきてくれるように思えた。それは、とくに、人に対して無関心だったKが傍にきて、私の顔をみてにっこり笑い、手をひいたことによるかもしれない。しかし、それだけではなくて、いろいろの子どもが私を優しい目で見てくれた。私は腰をすえて、ここにいつもいるという落ち着きをもって子どもたちを見ていたから、それは私の精神のプロジェクトだと説明もできるだろう。だがそれ以上に、実際に子どもを見る自分の目にも親しみが増したのだと思う。この子どもたちが、自分の子どものように思えたのは、私自身が、この子どもたちの生活と成長の土台のひとつに組みこまれたという存在の根底の問題かと思

う。

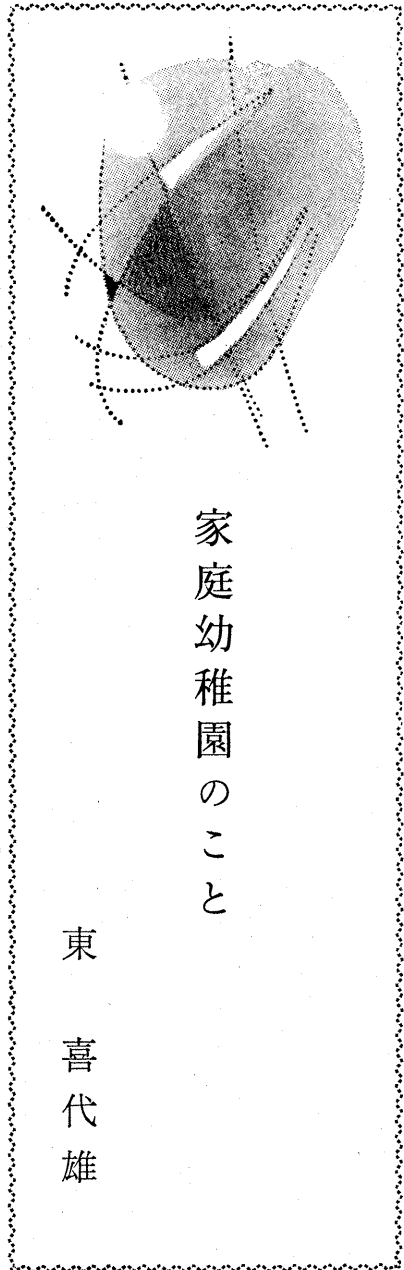
日がたつにつれて、私にとって明白になってきたもうひとつのことがある。それは、たとえ私が毎日子どもたちに接したとしても、長としての立場から見るので、ひとりひとりの子どもに対して、知りうることは限られているということである。毎日、それぞれの子どもと親しくして、その子どもたちの生活全体を見ているのは担任である。特定の子どもについての理解を深めているのは、ひとりの子どもとゆっくりとつきあっている実習の学生の場合もある。私は次第にそれぞれの子どもともっと親しくしたいと思っているけれども、ある限度をこえることはできないだろう。

担任は、自分の担当する子どもについて謙虚である。それは、子どもを少しわかったと思った日には、子どもは変化しており、自分の理解が絶対であることなどありえないということを、体験的に知

っているからである。それだけに一般には不動の体系的知識をもつようにみえる専門家に対して、簡単に自分を明け渡ししてしまうおそれがある。

子どもに対する立場は、人によって異なるが、それぞれの立場をこえて、保育の観点から共通のことがひとつある。それは、子どもと直接にふれて、共に過ごすひとときは、その気になればだれにでも与えられるということである。そのときは、子どもも心を打ち明けてあそぶ。このときのことについては、一度限りの訪問者も、いつもそこにいる人も、立場をこえて、同じ権利をもって語ることができる。

(愛育養護学校)



家庭幼稚園のこと

東 喜代雄

狭山ひかり幼稚園は、東京・池袋から電車で五十分たらずのところにある。名産の「狭山茶」と、養蚕のため
の桑畑がひろがる武蔵野の、しかしこの頃は東京のベッ
ドタウンと化している住宅台地に、渾然として建ってい
る。

今から十年前になるが、その年は園で飼っていたかい
こが、三・五キログラムのマユをつくった。

稚蚕が五度の脱皮をくりかえして、マユをつくり、や

がて蛾になって一生を終るさまを見るのは、幼児にとつ
ても、わくわくするようなドラマらしい。その年は、マ
ユを熱湯で煮て真綿をとったり、坐繰りをやったりし
た。

ところが、今どき「坐繰り」（マユから生糸をとり出
す手回しの簡単な装置）のできる人などいない。ついに
地域の古老を招き、子どもたちの前で実演してもらっ
た。

頬はこけ、腰は曲がり、黒く深いしわに年齢を刻んだ老婆は、それでも手つきあざやかに生糸を繰っていた。

ところが、ひとりの幼児が何をおもったか急に、

「せんせい、それ何にすんの——？」

と老婆に向って質問したのである。老婆はしばしためらっていたが、やがてていねいにその質問を受けとめてくれた。

おそらく、生まれて初めて「せんせい」と呼ばれたのであろうし、これからもそんな呼ばれかたはしないかも知れない。しかし私は、そこに新しい幼稚園を見たのである。

なにもブランコや砂場があり、折り紙や保育室がなくとも、子どもの興味をゆさぶり、好奇心をかきたて、感動を呼びさます人ならだれでも、「教師」になりうるのではない。つまり幼児にとっては、彼らのいるところはどこでも日だまりも、縁がわも、電車の中も、いろいろばたも、野山も地域社会すべてが幼稚園といえるのではないかと思つたのである。

折から幼稚園は、子どもがみずからからだごとぶつかっていける体験的保育を実現するために、どうしたらよいか試行錯誤していた。子どもはからだを動かすことで、体験と知識を結びつけ、またことを思考の道具として身につけていく。いわば知識は、経験をへてこそ本物になる。

子どもたちにとっては、見せてもらえない教育はインチキでしかない——といきまいて畑を耕やし、野菜をつくって調理したり、試食したり、大工道具やナイフを設置して自由に、あらゆる素材に取りくめる配慮をしたりした。

ところが幼稚園はそう思つても、実際には、時間帯、教材、幼児数、保育者数、個人差、など保育における環境にいろんな限界がある。従つて思うことの何分の一もできないことになる。

しかしもし、幼児の数を六人か七人に分けたらどうだろうか。それにたっぷり時間をかけて、緻密に対応できれば、豊かな展開ができるのではないか——。

そんな絡みあいの中で生まれたのが、俗称「家庭幼稚園」である。「家庭幼稚園」の呼びかたは、七月の「お泊り幼稚園」に対応してつけた呼び名である。早朝の保育、真夜中の保育、真冬（夏）の保育とあるように、家庭にも幼稚園があってもいいのではないかと軽い気持ちだった。

家庭幼稚園のスタートは、グループわけからはじまる。大体のところは、園児名簿をみて、生年月日順に上から下から数えながら、六人のグループをつくっていくが、それだけでは困るグループもできるので、兄弟の数、家族構成、家の造り、性格、親の職業、地域性などを総合的に判断して、かたよらないようにして編成する。

六人のグループをつくるのは、だいたい男女同数にする、一人が欠席しても友達関係に大した影響がない、また実施の期間が九月から十月の毎週土曜日、六、七週間ということ、その長さにも合っているなどの理由である。

る。

こう考えてくれば、むずかしい話のようにもきこえるが、要は、「あなたのお子さんの友だちを、およそ五年に一回あなたの家庭に招いてください」ということなのである。

はじめの頃は、私の家は忙しい、赤ちゃんがいて手が離せない、これは体裁のよい週休二日制ではないか、実質的な月謝の値上げだ、園の仕事の肩代りか——という人もあったが、三年目からはむしろ親の方がこの試みを歓迎するようになり、いまは反対らしい発言をする人は一人もいない。

それは、この試みの結果のところ、述べるが、その効果が親にも子にも理解され、それなりに評価されているからであろうと自負している。

さて、家庭幼稚園を始めるにあたっては、およそ二週間前にオリエンテーションを行なう。そこでこの試みの目的、目標、内容、方法などを説明して、作成しておい

た幼児の組分け表を配り、親たちの顔合わせをする。やがて、グループに分かれて、親たちは実施の順番、内容の検討、配列、方法、費用などを話し合いによって決定していく。子どもたちの要求が加味されるのはいうまでもない。

第一回目を聞く前に、二回も三回も集まって話しあい、中には、茶菓子をさげて家庭を訪ねたり、園への報告書とは別に、グループでの「まわし報告ノート」をつくったりするところもある。

保育の内容は、はじめの頃とはずいぶん変化してきた。

十年前は、「手が虫歯になった」といわれたところで、「なにかを作る」ことに力点をおいていた。しかし数年後には、ものできぐあいより、それまでの過程や、その中における心のふれあいが大事だというようになり、その形は問わず、それぞれの家庭ができる範囲でできることをやるようにした。

Mさんは、赤ちゃんがいるのでできないといってきた

人であったが、結局はおむつを洗い、脱水して乾かし、とりこんで、折ること重ねること、そのうち赤ちゃんが泣くと、みんなの目の前でおむつをとりかえるという実演をやった。

「あなたたちだって、ついこの前まではこうしていたのよ……」と言いながらである。大好評であった。

Sさんは、川畔に子どもをつれていってジュズ玉を取し、おばあさんと手わけをして「おてだま」づくりをやった。もちろんできあがったらあざやかな模範演技つきである。ついでに、ジュズ玉のネックレス、ブレスレットもでき上った。

商店経営のHさんは、店の中をくまなく見せた。在庫品、ハカリ、レジスター……子どもにとっては目をみはるような経験だった。

Hさんは、子どもの靴と靴下の洗濯。

Nさんは、あまり園ではおしゃべりしない人であるが「トリ釜メシ」つくりの名人、Aさんのお父さんは年休をとって竹馬つくってくれた。

テントを張って、カレーライスをつくってキャンプをしたグループ、電話局や工場を見学したグループ、サイクリングや、マス釣りもあった。

Kさんは、団地の十二階に住んでいる利点を生かして紙飛行機をつくり、そこからとばした。おまけに風の流れたかたがわかったそうだ。

絵本のよみかせ、料理、紙工作、虫とりなど、活動は毎年多彩であるが、民俗伝承的なあそびもかなり顔を出している。

報告書を見てみると、お父さんたちが積極的に参加していること、おじいさんや、おばあさんの協力を得ていること、地域の公民館、公園、諸機関はじめ川あそびや電車による遠出にいたるまで、地域の特殊性をよく利用していることがわかる。

今では、この保育の進行にならぬ不安を感じない。母親たちは予想以上の情熱と、専門家顔負けの配慮と子どもあつかいの技術にたけていた。

よしんばうまくいなくても、その報告書を見る限

り、

「はじめる前は不安で仕方がなかった。年長組になったときから、家庭幼稚園のことが負担となって、どうしようもなかった。でも案ずるより生むは易しで、今になってみるとどうしてもっと早くやらなかったのかと思う。年長組だけでなく、年中組もあった方がよい。それも早ければ早いほどよい」

「こんど、もう一回やることがあれば、この次はもっとうまくやれると思う」

「子どもは、〇〇を教えてやろうとか、指導してやろうと、おとなの側で「かまえ」てしまうと、身をよけて逃げようとするが、いっしょに楽しもうという姿勢になると、ものすごくなついてくる」

「先生たちの毎日の苦勞を思わずにはおれなかった。その反面、子どもと接することの貴さもちょっぴりわかったような気がする」

など、それなりに充実し、また学習をしていることがよくわかる。

私は、十年来この試みを進めてきて、そのねらいや内容には変化があったことは認めるけれども、その効用は何だと質問されるならば、およそ次のように答えることができる。

本来なら、それは親の側からの効用と、子ども側からのそれと分けて考えなければならぬのであろうが、「子どもと共にあることの喜び」とある母親が言っているように、子どもによって体験した幸せや喜びを考えると、わけて考えるのはむしろ不自然にも思える。

その母親は、「子育てがわずらわしく、一日も早くそこから解放されたいとねがっていた。しかし子育ての真最中に、人としての幸せをつかむことができなければ、子育てが卒業したからといってみつかるものではないだろう」と報告書に述懐している。

そんなわけで、この試みは子どものための試みか、親たちのための試みかとただされるなら「どちらともいえない」といわざるを得ないように思う。

少なくとも、父母会や講演会で机をならべ、顔と顔を

合わせて、教えたり、話し合ったりするよりも、こうして子どもを介して、いっしょに汗を流し、からだごとで活動し、同じ目的にむかって同じ体験をくり返すことのほうが、はるかに理解は早く、通じあえるということは事実のようだ。

子どもたちは、他律的とはいえず、新しい仲間との思いもかけぬ交流が始まる時、新しい関係が家族ぐるみではじまる。今日兄弟の数が少なく、それも男だけとか女だけという場合も多い。従って、自分の家庭を「絶対的な家庭」と思っていた幼児が、いろんな家庭があり、いろんな生活様式、いろんな生活態度・構成があることをわかっていく意義は大きい。

わが家と同じように、よその冷蔵庫をあけたとたんピシリとやられたとか、うちではいいのに、よそではベッドの上で遊んでいたら叱られたとか、あの家には廊下があるとか、屋根裏があるとか、五右衛門風呂があるとか、初体験が続く。

祖父母のいる家庭、田畑のある家庭、職業によってか

わる家庭の姿を直接見てまわったのである。

このへんは親たちも同じである。Oさんの家には、開關以来はじめて異性の友だちがやってきた。わくわくしたのは母親の方だといった。

Nさんのうちで一番はりきったのは、おばあさんだったという。近所のおばあさんを招いて、いっしょに真綿をひいてざぶとんを、子どもたちに作らせた。

こうしてお母さんたちをはじめ、父親、祖父母たちが、長年語ってきたその経験や行動力を、閉鎖的なひとつの家庭にとじこめておくのではなく、ひろく社会に、なかんづく子どもたちに還元したのである。

今日、社会的に「地域が崩壊した」といわれるが、こうした試みは、地域のもつパワーを掘りおこしたという意味で意義があるのではないだろうか。

月曜日になると、子どもたちは家庭幼稚園で得た感動や、作品や、あそびをそのまま園にもちこんだ。そしてそこにまた新しい展開があったりする。

母親たちの変化もあげておきたい。もちろん、すべての人ではないが、親たちの中には、自分の価値観を絶対視して、無理やりその類型に子どもをはじめこもうとする人がある。そんな親たちにとって、家庭幼稚園は、わが子のありようを、友だちの中で実際に観察する格好の場となっている。比べることもできるし、知らなかった新しい側面も発見できるし、よさの再確認にもなる。

ある報告書には、

「これまで欠点だらけだと思っていたわが子が、案外しっかりしており、よく気もつくし、長所もたくさんあることに気がついた」

「わが核家族だけでは想像もできないような息子のはしやぎぶりを、啞然として見つめた」

「いろんな人がいておもしろかった。わが子もなかなかやるわいと思った」といっている。これらは、わが子を「絶対的な個」から「相対的な個」へ視点をかえることによって理解しえた感想ではないだろうか。子どもを見る目がかわったとか、視野が広がったとも、いえるよう

に思う。

母親たちの人間関係の拡がりも無視できない。いや応なしにあてがわれたグループではあるけれども、黙って進展しないのであるから、主体的に考え、決定し、行動しなければならぬ。協議も、意見の聴取も調整もしなければならぬ。そんな共同作業の中で仲間意識は育っていく。

この試みがきっかけになって、親戚つきあい以上の交際を深めている人もあるし、卒園後五年たっても六年たっても集まっているグループもある。また中には、子どもたちを招きあって宿泊させあつてるところもある。

当地には航空自衛隊の基地があり、二、三年ごとに転勤する人が多い。自衛官でなくても、転居する人は意外と多いのであるが、そんな人は、深い交際を心がけても長つづきするわけがないので、心配ごとがあつても、相談したいことがあつても「黙っている」という。

転居はしないでも、人との交流に消極的な人もいるだろうが、ここでは子どものために意欲的、積極的に行動

する母親の姿が一般的である。そうせざるを得ないのである。

そうした親たちの充実感や、満足感が子どもたちにプラスに働くことは事実であろう。そういう影響力も期待はしているのだが――。

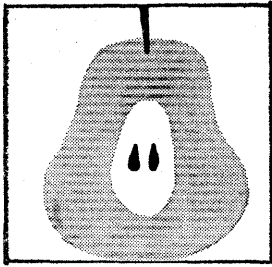
こうして書いてくると、やたらにプラスの面だけを強調してきたような気もしている。しかし、読者にはこの「家庭幼稚園」だけをもって園や、園と両親のかかわりについて即断されては困るのである。園は、この試みについてだけでなく、あらゆる行事や保育そのものについて、その目的や方針が理解され、親たちの理解が得られるように努力している。もし論じようとするれば、むしろそのへんのかかわりこそ大事なかもしれない。「家庭幼稚園の試み」といっても、わが園にとっては、単なる保育の一点にすぎないのだから。

(埼玉・狭山ひかり幼稚園)

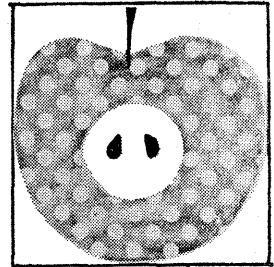
秋の一日

大自然の中のおにぎりの味

佐々木和子



きょうの子供達の登園光景は、いつもより一段とにぎやかである。それもそのはず、カラリと晴れあがった気持ちのよい朝と、大好きなお母さん手作りのおにぎり持参の登園だからであろう。本園では四月から十一月迄の毎月二回を「おにぎりの日」と決めている。(平常は月曜日・金曜日迄完全給食が実施されている。四歳で入園した四月の下旬から「おにぎりの日」が実施されるのだが、おにぎりの日には雨天でない限り必ず園外に出かけて、そのつど、その場の自然の中でほおぶるのが恒



例となつてゐる。従つて「おにぎりの日」は「園外保育」であることを子供達はすでに知つてゐるので登園状況が楽し気なのである。

本町は、山と川と海のある町で自然も満喫するには事欠かない。四歳児はバス通園の為歩きなれないこともあつて、はじめは園の裏山……しだいに園周辺の田んぼの畔道……やがて七月中旬頃には年長児と連れ立つて海まで(約二キロ)出かける。畔道に出かけていけば小川にはカラス貝、ドジョウ、オタマジャクシがみられ、最初の約束事などすっかり忘れ泥まみれになつてそれらの小動物とたわむれる。シロツメ草の相撲。首切り競争。首飾り編みなど自然物利用の遊びを伝授する格好の場ともなる。五歳児の場合は、進級と同時に隣接してゐる小学校の登校班と徒歩で通園するので、どの子供も足どりがしっかりしてくる。(因みに毎日片道四キロの道程を歩く子供は年長八九名中三一名いる。)従つて四月下旬のおにぎりの日から二十キロ位の道程を遠出している。桜の

花見をしながら時には桜の花びらの舞い散る下でのおにぎりの味は又格別のようだ。

入園、進級はじめの頃は発達段階に応じてそれぞれの場所を計画するが、四歳児が幼稚園に慣れはじめた頃、又、五歳児も年長児としての自覚が備わつてきはじめて七月頃から、更には季節的にも水遊びの楽しい時期なので、年少は「波にさらわれたりしないように海での約束や、合図を守つて遊ぶ。」「砂浜で貝拾いや、穴掘りなどいろいろな遊びを楽しむ。」「年長は「年少児と手をつないで歩いたり、一緒に遊ぶなどやさしくする。」「合図や指示に従わないと、波にさらわれたり怪我するなどの危険があることに気づく。」「海辺で貝を拾つたり、小動物をみつけたりして存分に遊びを楽しむ。……というねらいのもとに海までおにぎりを持って出かける。四歳児と五歳児の歩き方には随分差がみられる。しかし、教師が予想した以上に年長児は年少児の面倒をみてくれる。例えばズックが脱げれば立ち止まってなおしてくれたり、危険な国道では車道側を年長児が歩いたり……。」「いたわ

り” “おもいやり” ……など形として具体的には表現出来ないことなのだが、おもわぬ場面で情景がみられる。

一八四名の子供が延々と歩く様子に、近所の窓々からよく声がかかる。「どこさ行く？」（どこに行く）「海さ

いくんだでー海さよ！」（海に行くんだよ、海だよ！）

「天気よぐていがったなあ氣つけて行くんだよ。」（天気よくて良かったね。氣をつけて行くんだよ）さりげない会話のやりとりの中に、町民の暖かい心づかいが感じられうれしくなる。海でのひとときは、ひとりひとりの子供達に十分な満足を与えてくれる。波打ち際で波とたわむれる子供。砂を掘っては海水をためこむのに夢中な子供。小石や貝殻拾いの子供。波で打ち寄った廃品（ママレモンの空容器、いろいろな形のビニール空容器…）集めの子供。波がひいたあとに小さな穴がいくつも出来るのに気づき、その穴の下はどうなっているのか掘りかえし、小ガニをみつつけ大声で「カニだ。カニだ。」と宝物発見の知らせをする子供。ビニール廃品を集めた子供が早

速駆けつけそれに小ガニを入れる。海水を汲んでカニの容器に入れる子供。次々と浜辺でドラマが広がっていく。かえりには弁当カバンの他に手に手に海で集めた宝物がしっかりとにぎられている。

今日は二期期になってはじめての “おにぎりの日” である。きょうの目的地は「望海の丘」であることも知っているが、この場所は年少時にも行っているが、今日の場合はグループで散策するという楽しみがある為格別張り切っている。距離も片道六キロということで途中の牧場迄通園バスを利用する。牧場主は友達のお父さん（在園児）なので、牧舎を自由に見せてもらえてうれしそうである。この牧舎から昨年とちがった経験をするのである。子供達が名付けたどんぐりコース、きのこコース、くりコース、つり堀コース…とグループ行動を開始する。どのコースを歩くかはあらかじめ相談で決めているので、もめる事もなく歩き始めるが途中で必ずトランプが生ずる。先頭を歩いている子供が気に入った木

の実（どんぐり、くり…）を最初に沢山拾ってしまう…
というのが原因なのだ。後方の子供がその場所について
木の実を拾おうとすると、先頭の友達「青組に負けそ
うだから逃げ」とうながすのである。四キロの道程、し
かも起伏の激しい山道をこんなトラブルをしながら黙々
と歩く。目的地近くまでバスで行く年少組が先きに到着
して、目的地から「ヤッホー」と呼びかける声に、目的
地迄には未だほど遠いにもかかわらず大声で応答してい
る。

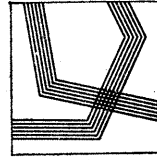
四歳の四月から五歳の現在（九月）まで段階をふみな
がら経験してきた園外保育なので、ぐちや泣き事もい
わず歩き通す。少し秋の気配がただよった丘で、仲間と
気に入った場所を選んでの昼食は本当に楽し気である。勿
論かえりの弁当カバンには子供にとっての山の幸がいっ
ぱいつまっている、かえりは疲労度を考慮して年少・年
長全員バスでかえるのだが、バス待ちの間心細くなった
年少児が山の風の音をきき「先生、風が早く帰れってい

ってるよ」…というのに対し年長児は「あれはね、又
おいでっていつてるのだよ」…となくさめる。教師に
とって今日のねらいが十分果された会話のやりとりであ
る。

こうして四月からきょうまで、更に十月十一月と自然
の移りかわりと共に園外での経験や活動を取り入れてい
る。本園では「おにぎりの日」||「園外保育」||「遠外
歩育」としてとらえ二年間の計画を教育課程に位置づけ
ている。「心の豊かな人間性をはぐくむ。たくましい子
どもの育成をみざす」…と教育目標を掲げているが、目
標達成の為に恵まれている自然を十分に活用し、地域に
根ざした幼稚園を子供と共に作るよう頑張っている。か
えりのバスで居寝りしている年長児をみてこの小さな足
で歩き通したことに涙がこみあげてくる。「あしたも元
気な笑顔を見せてね」と心の中でつぶやく。

（秋田県・西目町立西目幼稚園）

母・子・友



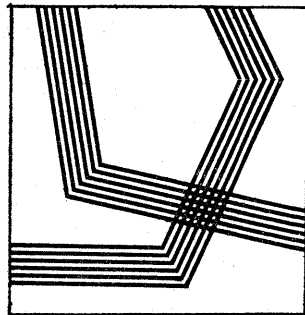
「お山には赤い羽根がいつばいあるよ」と幼な児はうたうごとくに。

友だちと手をつなぎ、くもの巢の下をくぐったり、兎の御馳走を採ったりしながら、石ころ道の列は続く。楽しい語らいの道は山に続く。

へ 草の根に つかまりつかまり登るわれに

母さん荷物と言いくれし

河井 多喜子



吾子は ことし四才。

母親が子どもと共に山に登る

小熊のように四つん這いで登る母

山の土が乾いていても良く滑るし、雨あがりでお汁粉のような泥なら一層つるつるすべる山を、子どもたちは上手に登りおりする。

一番良く滑る箇所、真中のつるつるのところを、立ってスキーのように滑りおりたり駆けおりたりするのを立

ち滑りと言って、子どもたちの間では最高の名誉とされる。

母には至難の技である。頼もしい我が子よ。歩行の不自由な幼児も、私にすすきの枯れ葉を上から差し出して助けてくれる。力強い心の綱である。

葉っぱよ 切れないで……

ようやく登れば一斉に皆の拍手と笑顔が……すすきの穂は白く輝やき、下の方を眺めれば江ノ電がいつもむしのように海のそばを這う。帰りには葛の葉など兎の御馳走をかかえてくださる。

いだかれて山に

いだかれて子どもらの群に

からすうり光る 秋の木々の中

みあげれば青空

よじのぼり すべりおりた

あの大きな山肌に

今日おまえは 何を見たのか

母よりも もっと大きな

ふところに

いだかれて はるかに

いだかれて いまおまえは……

身体のあまり丈夫でないひとつぶ種を一心に育てている或る母はよろこび詩う。

「昨日はころげる程、笑ってしまったんですよ」と、まがりくねった木陰の道で、ぱったり出会った笑顔の母が話しはじめた

「ヘルメットかぶった子、僕はいやだなあ あの子はお弁当を食べるのはのろいし、トイレには何べんも行くし、足は細くてつっぱっているし、嫌だなあ」

「あら、それはあなたの事じゃないの？」と母

「ううん（強く否定）僕は。。。。。」自分の姓名を力強くきっぱりと

「それでは、その子は何と云う名前？」

「ヘルメちゃん」

ひっくりかえる程、笑ってしまいましたと、繰り返して、朗らかに笑って話しているその母

いとし子が五才の今日になるまでの涙を秘め心さわやかなその笑顔

右と左に別れて私の眼が沈む。

前日、海からの帰り道、彼と手をつないでいた友だちが「どうしてこんなに足が細いの？」と急に言ったのを思い出した。「だんだんあなたの足のように太くて丈夫な足になるのよ」と答えたのだけれど。海で波にも挑戦するし、山にも登るし、何にでも積極的に取組む彼。嬉しいネ。

へ七里が浜　夕陽ただよう　波の上に

伊豆の山　果てし　知らずも

西田幾太郎先生の和歌を刻んである、かわいい握りこぶしを顔の前にかざしたような、ひそやかな記念碑が小さな砂丘にうずまりそうになって立っている。

三十年程前まで美しい松林の中で子どもたちと、遊んだりお弁当をひろげたりしたそのすぐ先に碑があり波に続いている。

江ノ電も松林の間をゆったり走り、林も海も太陽もこどもらも我も一つに触れ合い、今も胸に生きる華麗な思い出のひとつま。

いきいきとした人間、戦争も差別もない生き生きとした世の中をつくるために。自分がおかれた幼児教育の場で、子どもたち母たち仲間たちと手をつなぎ、平和を守る輪をひろげ力を結集する秋こそ今！

(聖路加幼稚園)

私の本棚

向山陽子

ブラッと入った本屋で、引きつけられるように、買わずにはいられなくなる本に巡りあえた時、とても得をした気分になって帰路につく。お財布の軽さに、次のお給料日までの日数を指折り数えるはめにはなるのだが――。

「まんげつのよるまでまちなさい」

マーガレット・ワイズ・ブラウン作

ガース・ウィリアムズ 絵

松岡享子 訳

ペンギン社

八〇〇円

頁をめくるたびに、あったかいおかあさんと、かわいいぼうやの、あらいくま親子の日常生活が、幸せいっぱい伝わってきます。

でもぼうやは、その幸せな大きな栗の木の根元にある住みごこちのよい家から外へ出て、夜をみたくなるのです。しかし、おかあさんは「今はだめ、満月になるまで待ちなさい。」

ぼうやの夜への想いはふくらんでいきます。でもおかあさんは、そのたびに、やさしく自信をもって「満月の夜まで待ちなさい。」と、うたを唄い、抱いてくれます。

待つて待つて待ちきれなくなって、もうこれ以上待てなくなつた時、「ぼうやは、大きくてあつたかいおかあさんを見上げて、きっぱりといいました。

『いいかい かあさん。ぼく、これから、森へ夜をみにいくからね。いいでしょ？』すると、かあさんはこたえました。

『もしお前が 森へでかけて行って、夜を見たい

なら、(中略) さあ、いっといて、だって今夜は

——満月の夜だもの！』

このきっぱりと宣言する ぼうやの成長した姿。

そして、子どもの成長を見届けて、一人で夜へ出す

ことのできるきっぱりとした母親の姿。この時が何

と、満月の夜だったのです。

「時が満ちる」「内なる時 外なる時」「親(教師)

と子」「……ジーンとにじんだ涙をふきました。この

あらゆるまのおかあさんのようになりたいと思うの

です。

「かみさまへのてがみ」(Children's Letter's

to God)

「かみさまへのてがみもっ」と(More)

エリック・マッシュナル &

スチュアート・ハンブル 編 各六八〇円

谷川俊太郎 訳

葉 祥明 絵 サンリオ

私、おちこんだ時、開きます。活字嫌悪症になつた時、見ます。純なものにふれたくなつた時、読みます。

そして泣ける位、笑います。心にグサツとききます。励まされます。

アメリカ合衆国の子どもの達の「かみさま」への手紙を集めたもので、彼らの手描きの筆蹟が、つづりや文法の誤ちもそのままに生かされています。(誤ちをみつけると、浅はかにも嬉しくなります。)

「かみさま」への率直な、賛美、質問、願い事、そして、注文、時には知恵を分けてあげています。

のびやかな素朴な、忘れかけていた心にふれて幸せになります。

「人間のさまざまな経験の中でも、無邪気さと、子ども時代のおどろきに対する郷愁ほど長つづきするものはありません。」(编者)

「おとなになるといふことは、自分の中の子ども

を捨て去ることではなく、むしろそれをつきつめてゆくことなのではないか。」(訳者)

「ニホンザルの生態——豪雪の白山の野生を問

う——」

伊沢紘生 著 どうぶつ社 一八〇〇円

筆者は、日本モンキーセンター研究員を経て、現在、宮城教育大学助教授。

自ら、冬の下北半島の山中に入り、野生の猿と生活を共にしながら、その行動を観察し、遊動生活をする野生のサルの、本来の生きようを見ようとしている。

今まで一般にいわれてきたこと——「役割分担」やボスを頂点とする「主従関係」のはっきりとした「序列社会」。又コードモ時代の仲間同志のあそびが、将来、サル社会で生活するための基本的なことなど——は、野生のサルの生活には見られないことであ

り、むしろ不自然に「餌づけ」されたサルの「ひずみ」であることを指摘している。

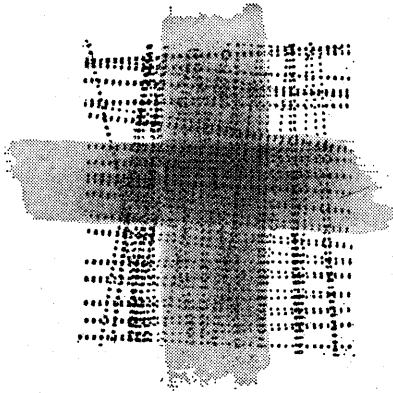
さらに筆者は、餌づけされたサルに関して①野生のサルより小振りなこと、②オトナのメスザルの尻が汚ないことを掲げて、いずれも「餌づけ」という人間の干渉と無関係ではないと、心を傷めている。

私はこの一冊との出会いで、今までの人間の子どもの社会に関する、固定観念を根本から揺がされた。

私が、毎日、接している子ども達は、本来、野生のサルであるべきだったのに、餌づけされてしまった姿ではないか？ そのひずみは？ 我々の「社会」への固定観念から見直す必要はないのか？

筆者のフィールド・ワーカーとしての姿勢と行動は、実践者としての私に、多くのものを与えると同時に、多くの反省を迫ってくる。(大和郷幼稚園)

近代短歌に現われた子ども (十三)



大塚 雅彦

(27) 中城ふみ子

中城^{なかじょう}ふみ子は本名富美子、大正十一年、北海道帯広市の野江家に生まれた。生家は始め雑貨商、後に呉服商となった。庁立帯広高女を卒業し、更に上京して東京家政学院を卒えた。昭和十七年四月、札幌で鉄道技師中城博（北大卒）と結婚（二十才時）し、三男一女をあげた（次男は夭折）。昭和二十一年頃より夫と不和になり、二十五年から別居、二十六年遂に離婚するに至る。昭和二十九年八月、三人の子をのこして札幌医大病病棟で三十二才の生涯を終った。現在、帯広神社の裏手にあるふみ子の歌碑「冬の皺よせめる海よ今少し生きて己れの無惨を見むか」の歌の如く、この世に尽きせぬ思いをとどめて——である。

彼女の歌と生涯は、彼女の短歌を読み感激して取材のためはるばる彼女を訪ね、彼女のとりこになって病床につき添った時事新報記者若月彰のルポルターージュ風の著書『乳房よ永遠なれ』（昭30）でいち早く紹介された（その後、女優から転進した田中絹代監督によって同名の映画にもされている）が、更に、ふみ子の亡くなる四ヶ月前に札幌医大に医学生として入学し、後に直木賞作家となった渡辺淳一の作品『冬の花火』（始め歌壇綜合誌「短歌」に昭和四十七年四月から四十八年十二月まで連載され、昭和五十年十一月単行本として刊行）に小説化されて、このユニークな歌人の行実が広く知られるに至っている。

彼女は女学校在学中より短歌に親しみ、家政学院在学中に歌を作って教師の池田亀鑑（国文学者）に指導を受けた。昭和二十二年、北海道の結社誌「新壘」に入社し小田観螢に師事、二十三年に「辛夷」の会員となり野原水嶺に師事、二十六年には「山脈」同人になる。二十七年に中央の女流綜合誌「女人短歌」会員となり、二十八

年には「潮音」入社、二十九年には「凍土」同人となる等、実に目まぐるしく多くの結社に関係した。二十九年四月、歌壇綜合誌「短歌研究」四月号に、「第一回五十首詠募集」に応募した彼女の作品が特選となり「乳房喪失」の題名で発表されて一躍注目を浴び、続いて同じく綜合誌「短歌」の同年六月号には川端康成の推薦文つきで、「花の原型」と題する五十一首が巻頭に掲載された。この二つの綜合誌への登場は、囂囂たる賛否両論をまき起し、ショックキングで華やかなスターの登場の感を与えた。「身ぶりを誇張している」とか「全体がつくりものだという気がする」とかきびしい批判が多かったが、文壇の大家川端康成の推挽とか歌人でも宮柊二等の支持もあって、「中城旋風」という語が出るくらい、歌壇は湧いたわけである。当時、新人発掘を目指していた歌壇ジャーナリズムのニードの流れに乗った好運もあった。この二十九年という年は中城のみならず、後に前衛歌人として著名になった塚本邦雄の「裝飾樂句」とか、寺山修司の「チェホフ祭」とかが「短歌研究」に載った

年でもあり、これは同誌の編集者であった中井英夫（現在は作家）の演出による面が強く、げんに中城ふみ子の特選詠は原題が「冬の火花——ある乳癌患者のうた」であったのを、中井が勝手に「乳房喪失」と変えて発表したものであることを、後に中井自身が回顧的に書いている（中井『黒衣の短歌史』昭46・6）。

ふみ子は乳癌のため二十七年四月に先ず左の乳房を、次いで翌年十月には右の乳房を手術で切断し、女性の生命ともいふべき両乳を失うという悲哀を味わうが、後に癌は肺に転移し末期的癌患者となってゆく。しかし、その二年の間にも「恋多き女」として彼女は愛の焰を燃やし続けた。渡辺淳一の小説では、彼女が夫の他に六人の男と愛を交した華麗な「愛の遍歴者」として描かれている。いふなればこの男らとの愛の交流と、そのはげしい文学的噴出ともいふべき短歌制作とに支えられて、彼女は短かい人生を一気に駆け抜けて生きたのであり、私にはフランスの文豪スタンダールの墓碑銘「生きた。恋した。書いた。」が、ゆくりなくも想い出される。彼女の歌

集には川端康成の序文がある『乳房喪失』（昭29・7）と、歿後の刊行である『花の原型』（昭30・4）があり、

角川版『定本中城ふみ子歌集・乳房喪失—附花の原型』

（昭51・2）や、現代歌人文庫版『中城ふみ子歌集』（昭

56・3）も刊行されている。彼女の登場は短歌史的には

突然変異的に唐突のものであり、彼女の作品ほど毀誉褒

貶にさらされたものはないが、「その特異な生き方と大

胆な表現は罵声を浴せられながらも、前衛短歌から新鋭

の登場をうながす導火線となった」（短歌研究社版『系

譜別現代歌壇総覧』昭41）といえるであろうか……。

① 悲しみの結実むかひの如き子を抱きてその重たさは限りも

あらぬ

② われに最も近き貌せる末の子を夫がもて余しつつ育

てゐるとぞ

③ 夜ふけて涙ぐみつつ子に還すもろき手の爪のエナメ

ルはがす

④ 父の家にかくれて遊びに行きし子を待ちて出づれど

黒き冬の川

⑤メスのもとひらかれてゆく過去がありわが胎児らは
闇に蹴り合ふ

⑥鼻に皺よせて笑ふ子は掌中の珠などと優しきものに
はあらぬ

①は『乳房喪失』第一部「裝飾」の「白き茎」と題する一連の中にある。ふみ子は前述の如く昭和二十六年に離婚、末子は中城家に引取られたが、長男（時に八才）と長女（五才）は彼女のもとに残った。その不幸な子供たちを「悲しみの結実の如き子」と歌ったのである。彼女は比喻や比較が巧みで、「失ひしわれの乳房に似し丘あり冬は枯れたる花が飾らむ」等是有名であるが、この①の歌のすぐ次にも「陽にあそぶわが子と花の球根と同じほどなる悲しみ誘ふ」という作品がある。夫とは長い確執の末に離別したが、その親の悲劇の被害者である子を歎いていると共に、「その重たさは限りもあらぬ」という叫びは、母自身の自己愛の嘆きということになる、と菱川善夫氏は述べている（菱川『鑑賞中城ふみ子の秀歌』昭53・5）。

②も第一部の「冬の火事」一連の中にある。別れた夫の方に引取られた末子潔（離婚時三才）を想う作品である。夫は国鉄のエリート技師であったが、業者に陥し入れられ所長の椅子を失い、生活が荒廃、国鉄を退職後も職を転々、愛人を作ったり、後に詐欺で逮捕されたりする。そのような夫のもとで育てられている幼な子をおもいやる心情は、やはり母親のものである。しかし、彼女の、子思いの歌はバセティッシュにならず、どこか醒めたものがある。この歌の「貌」を「顔」としなかったのは「外面の印象をひきたてるためであろう」と、菱川氏は前掲書で述べている。

③は同じく「愛の記憶」の一連にある。昼間は「女」としてエナメルを手の爪に塗っていたのを、夜になってそのマニキュアをはがして、情にもろい母親の手にして子供に還す、というのであろう。恋する「女」から「母親」への転換を、このような爪を操作する動作を媒介にして描いた作品を、私は他にあまり知らない。次に「子を抱きて涙ぐむとも何物かが母を常凡に生かせてくれ

ぬ」「幼らに気づかれまじき目の隈よすでに聖母の時代は過ぎて」等の作品が続いているのを見ると、もはや「常凡の母」「聖母」ではあり得なくなっている自己を覚知しているのであろう。異性への愛情や文学をおもふところが、彼女を駆り立てて「母親喪失」にしまったのだ。その悲愛もまた彼女自ら招いたものである。

④も同じく「乳母車」一連の中にある。「黒き冬の川」という語が心象風景めいている。一連にはこの他に「瞶りつつ見据うればあはれ甘酸ゆき杏の核のごとき子の顔」「コスモスの揺れ合ふあひに母の恋見しより少年は粗暴になりき」「物陰にたとど縋帯巻ける子は母に明かせぬ傷口もちて」等があり、いづれも父母の争い、離別や、母の恋などで傷つき、外傷体験を持ってゆく子が描出されている。結社誌に初出時は「或るストオリイ」の原題だった由、やや小説めいたストーリー構成になっている。

⑤は『乳房喪失』第二部「深層」の中の「葬ひ花」一連にある。乳癌手術の内容が生々しく詠まれている作品

が多い一連だ。「メス」はいうまでもなく癌の患部を切除してゆくのだが、それがわが「過去」を「ひら」いてゆくことにもなる、というのだろう。そして、この「胎児ら」というのは彼女が過去にみごもった胎児達ではなく、「まだこの世に生まれざる生命、未生の生命の象徴として理解すべきもの」と菱川氏は前掲書で述べている。つまり、「肉体の奥に植えつけられた原初的生命感そのもの」で「神秘的闇にかこまれた世界」「みごもった女にしかわからぬ根源的な生の実感の世界」と解している。すぐれた見解であろう。

⑥は歌集『花の原型』Ⅱ「不在」の「瑠璃いろの朝」一連の中にある。突っ放した表現で子を詠じている。「鼻に皺よせて笑ふ」のは母親の心を見抜いて、阿諛や軽侮の念をふくんで笑っているのだろう。もはや「掌中の珠」などという優しいものではない。子にベタベタしない屈折した心情が鋭くうたわれていて、『乳房喪失』の中の「豊かなる乳を今も保つ母の涙もろき盲点を子は利用する」等と共に、一種の醒めた「母うた」である。

(28) 斎藤 史

斎藤史は明治四十二年、東京の四谷に生まれた。父の劉は陸軍将校（職業軍人）で、しかも佐佐木信綱門下の歌人であった（昭和二十八年歿）。父の軍務につれ、旭川・津・小倉など各地を転住し、小倉高女卒業。その後、熊本を経て、昭和三年父が済南事件の折、旅団長として出征していたことから引責退役したので、父と共に東京に転住した。昭和十一年に二・二六事件が起るや、父は反乱幫助の罪で入獄、禁錮五年の刑を受けた。史自身も、この事件の反乱將校栗原安秀中尉、坂井直中尉（いずれも死刑）との交遊の思い出を自著『遠景近景』（昭55・8）に書いている。これより先、昭和六年に彼女は医師の堯夫と結婚し、のち一男一女をあげた。昭和二十年戦争のため、父の郷里長野県に疎開。夫は長野赤十字病院長となったが、のち退めて医院を開業、昭和五十一年に死去する。史は長野市にそのまま住みつき、今日に至っている。

父が「心の花」系の歌人であった関係の影響もあって（父劉は幾つかの歌集や、『万葉名歌鑑賞』の如き研究書や、『獄中記』のような随想記数冊等の著述がある）、彼女は大正末年頃より作歌を始め、昭和二年頃から「心の花」等に作品を発表している。昭和五年前川佐美雄らと「短歌作品」（のちの「日本歌人」）を発刊。昭和十四年父劉を中心として「短歌人」を創刊。昭和十五年には当時の歌壇の有力新人の作品を集めた『新風十人』に参加し、注目された。戦後復刊した「短歌人」を経て、昭和三十七年に歌誌「原型」を創刊、主宰してこんにちに及んでいる。古稀を超え、歌歴半世紀を超える、生命の長い現役歌人である。歌集は『魚歌』（昭15）、『歴年』（同）、『朱天』（昭18）、『やまぐに』（昭22）、『うたのゆくへ』（昭28）、『密閉部落』（昭34）、『風に燃す』（昭42）『ひたくれなる』（昭52、第十一回逍空賞受賞）等があり、その他、自選歌集『風のやから』（昭55）、同『遠景』（昭55）や、膨大な『斎藤史全歌集』（昭52）がある。また、随筆集『春寒記』（昭19）、前述のエッセイ集

『遠景近景』（昭55）や、歌論集『現代短歌人門』（昭29）もある。長篇小説が信濃毎日新聞に連載されたこともあり、多才な文筆家である。昭和三十五年に長野県文化功労賞を受けている。

彼女の歌風は反写実的で、モダニズムの影響を色濃くもち、芸術派歌人と称され、象徴風を加えた浪漫主義の華麗さと、実験的な意欲に支えられた剛直で機智に富む鋭さとを兼ねそなえている。

①暴力のかくうつくしき世に住みてひねもすうたふわが子守うた

②生れ来てあまりきびしき世と思ふな母が手に持つ花を見よ

③乳のますしぐさの何ぞけものめきかなしかりけり
といふものは

④雲などが流らふるよと見てゐるに全身をかけて子に頼らるる

⑤日昏れ寒く数枚の板戸押し閉し湯気立つものを子に食べしむ

⑥雨にぬれ冴えたる花も吾子の掌も我に向ひてひらく
ならずや

⑦軋み曳くゆふべの車さむがれる子を上に乗せ畑より
かへる

①から⑤までは処女歌集『魚歌』より抄出。①と②は「濁流」と題する一連の中にある。昭和十一年作である。

この年は前述の如く二・二六事件の起った歴史的な年である。作者は三十才くらいの女盛りであった。「濁流」

とはいうまでもなく、世情ただならぬ時の流れを象徴的にいったのである。運命が扉を叩いていた。この両首をふくむ七首の前には「五月廿日、童子語る。同廿九日、父反乱幫助の故を以て衛戍刑務所に拘留せらる」という詞書がある。この暗い時代に作者は結婚し、子を産んだのであるが、父は反乱事件に関与していたことを娘には言わないで隠していた。そのようないたわりを受けつつ、孩児を抱き、拘引された父の居ない家に帰って来た、という歌がある。こんにちの繁栄社会の中で安穩に結婚し、出産しているのとは違って、暴力が「うつく

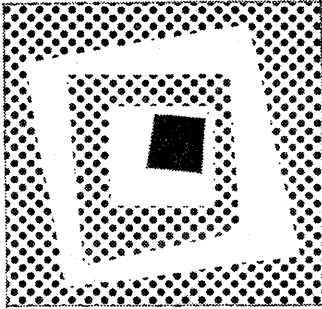
し」とされたそのような切迫した社会の中で若い女性としての切実な生活を送ったのである。従って、中野菊夫氏の述べるように「彼女がうたう子守歌は、戦前の疾風怒濤の日本を背景において考えるべきだし、その時代のなかでの若者はずしては〈暴力のうつくしき世〉は理解しにくい」（斎藤史・前田透編『短歌読本 家族』（昭

56・10）であろう。②の下句などはいかにも作者らしい、子供に対する呼びかけであるが、暗い世相下につくられた作品でありながら①②共にうつくしい歌で、私の愛誦歌である。③は「相」という題の一連の中にあり、昭和十三年作である。この「子」も長女童子であるが、「乳のますしぐさ」を何と獣めく姿態動作であることか、どうたい、生物としての人間の親子の結縁を考えているのも、いかにもこの作者ならではのと思われる。④も同年の作品で「灰」という一連にある。そのすぐ前の歌に「夫、教育召集を受け入隊す」という添え書があり、緊迫した日々が続いていた。しかし、そんな中でもやはり作者は「べうべうと北の氷原のふぶく日はわれのけものもうそ

ぶき止まぬ」と非情のロマンを求めていたのである。あるいは「雲などが流らふるよ」と天空に見とれていたのだろう。ところが、そういう母親も全身をかけて子に頼られているのだ、というのである。

⑤は「冬日」という題の一連にある。歌意は明瞭であるが、昭和十五年作で、そろそろ生活も苦しく緊縮させられてゆく時代だ。そんな中で、戸を閉して日暮れにあたたかい煮物でもして子供に食べさせた、というのだろう。この作者としては写実的な生活詠である（「すまい」というルビや、「食べ」という古語などは、やはり作者好みだが）。⑥は歌集『歴年』より抄出。昭和十五年作で「去来」という題の一連にある。花と吾が子の掌がともに私に向ってひらくではないか、という発想などは、いかにもロマン派歌人らしい。⑦は歌集『やまぐに』より抄出。作者も大方の疎開人と同じく、寒い信州上水内郡長沼村で村のりんご倉庫の片隅を借り、窮乏の生活を送った。昭和二十一年、疎開先での作者一家の生態のよく出ている歌である。（お茶の水女子大学）

エリクソンと幼児教育 (最終回)



仁科 弥生

育てあう関係、相互性について

エリクソンは、幼児期の恐怖にその起源をもつと思われるいくつかの大人の不安について、次のような分析を試みている。

子どもは幼児期の初期に、しつけられる過程で、身体的機能のあれこれを邪悪なもの、恥ずべきもの、或は物騒なものと考えるようになる。エリクソンはこの事実を重要視する。なぜなら、どの文化でもこの過程を利用して、子どもたちにその文化独自の様式の信仰や道徳意識、自尊心、自発性などの発達をうながすために、われわれの成就感覚には、必ずその幼児期のルーツについての疑惑がつきまとい、われわれを不安に陥れるからである。また、幼児期に、われわれは内面的、外面的善悪について痛い思いをしながら体験的に学ぶが、同時にそれを通して最初期の現実感覚をも学ぶ。そのために、自分の怒りの衝動や矮小感や分裂した内的世界から自分をおびやかすものも、まるで外界からおそってくる敵や圧力

であると思いがちになっている。そして、それが素地となって、われわれは、外からの、漠としてつかみどころのない巨大な力に侵略されるのではないかと不合理にもすぐに恐れるのである。また、心を許せない者ばかりに取り囲まれ、窒息するのではないかと心配し、或は嘲る聴衆の面前で徹底的に面目を失うのではないかとおののくのである。エリクソンは、これらが人間の不安を特徴づけるものであるととらえている。

また、自分にとって重要な意味をもつ行動を阻止されたり、或はその行為をなし遂げようとして許されなかった場合に経験するわれわれの不寛容性は、特定の器官様式が不毛化されることへの子どもの恐怖に対応すると考えられている。たとえば、口唇の段階では、食物が与えられず、空っぽのままに放置されるのではないかという恐怖、或は感覚的、官能的刺激に飢えるのではないかという恐怖がある。これらの恐怖が後になって交錯し、たとえば有り余るほどの食物に恵まれてはいるが、官能的親密さは満たされていないという大人の心に、刺激を求

め、飢えることを恐れる不安となつてあらわれることがあるという。次の発達段階である筋肉の領域に関しては、二重の不寛容性に由来する不安が指摘されている。すなわち筋力が無力になるほど束縛され、或は押えつけられているという感覚から生じる不安と、逆に全く押えられていないという感覚や、外的限界や境界線を見いだせないという感覚などから生じる不安である。さらに、自分の自律を明確にするために必要な方向づけも失うのではないかという不安もあるという。そして、そのような筋肉的サディズムと肛門的サディズムが結びついて、背後からおそわれることへの不合理な恐怖をわれわれの心に引き起こすことになる」と説明されている。

移動・男根期の恐怖として、男の子が抱く去勢の恐怖の仮説はよく知られている。エリクソンによれば、その他に、移動不能にされることへの恐怖、閉じ込められることへの恐怖があり、同時に、導かれないのではないか、また自分の自彊性を主張し、戦うために必要なはつきりした境界線を見いだせないのではないかという恐怖

もあるという。そして、ここに、男子が敵を必要とするという口実の幼児期における起源があるとみる彼の分析はきわめて興味ぶかい。つまり、具体的な敵の存在に対して自らを武装し、戦うことによって、男子は、知られざる敵が不意にあらわれて無防備の自分をおそうのではないかという執拗な不安から、実は救われていると彼は解釈しているのである。

女子の場合もまた、口唇期の満たされないままで放置されることへの恐怖や、肛門期の空っぽにされることへの恐怖が女性特有の不安につながるとされている。この点について、子どもの遊びの研究でエリックソンが空間の構造化に性差のあることを観察し、少年少女が身体感覚的に同じようには経験していないという事実を指摘したことはすでに触れた通りである。すなわち、女子が抱く自分の身体的イメージには大切な腹部が含まれているという。たしかに有機体として、人間として、或は社会的役割をもつ者としての女性の自己実現はこの腹部に依存している部分が多い。そこでエリックソンは、空っぽのま

まで放置されることへの恐怖や置き去りにされることへの恐怖は、女の生存全体にまで及ぶ基本的な女性特有の恐怖であろうと想定する。そして、このような恐怖から生じる不安が、女性をことさら男性の考え方に対して服従的にしたたり、或は逆に対抗意識をむき出しにして男性と競争させたり、また、男性をとりこにし、支配しようと女性をかりたてると分析している。そして置き去りにされることへの女性的恐怖から生じる結果について、彼はとくに次のことに注目している。私たちは周期的に競争や征服、戦争を遂行しようとする。このような男たちの所業が再三家庭を破壊し、息子たちの生命を奪うことになるにもかかわらず、女たちがそのような男の所業に疑問を抱かず、或は異議申し立てをしようとしなないのは、自分たちが捨てられ、顧みられなくなることをの無意識的に恐れているからであろうと分析する。したがって、まず女たちが見捨てられることへの自分の恐怖に気づくこと、また戦争のための戦争を繰返す男の愚かさに対して、自分たちがなぜ分別をもって疑問を起こそう

としないのかを女たちが理解することが重要であるという。つまり、男が起こす戦争は女が阻止しなければ、地球上から戦争はなくならないうというのである。このような見解に対しては異論も多いことと思う。なぜなら過去の歴史を振り返ってみるまでもなく、ことはそれほど単純なものではないからである。しかし、見方をかえれば、それは、男性優位のためにゆがめられてきた現代社会に対して女性が果たすべき重要な役割へのエリクソンの大きな期待の表明でもあると解することができるのではあるまいか。

以上のように、エリクソンは、人生が長い幼児期で始まり、他人への依存を余儀なくされるといふ事実が幼児期の被搾取性を助長するという人間生存の実態を指摘し、その中から子どもの怒りや恐怖が生まれ、さらにそれらから大人の不合理な不安が由来する様相を明らかにしたのである。そのような子どものもつとも初期の、しかももつとも意識されていない恐怖は主に身体的な構造と成長に基づく恐怖であるが、周囲の大人たちが示す予

測不可能な緊張と怒りに子どもが直面して経験する困惑にも関係して形成される。児童期の後半から思春期にかけては、このような恐怖は年上や年下の競争相手と関連して生じる。そして青年期に至り、社会的変動が引き起こす同一性喪失の恐怖が、幼児期の経験を通してわれわれの心の中でくすぶりつづけている不安を呼びますことになるといふのである。また、大人の偏見や誤った判断の中には、幼児期の不安に対する防衛メカニズムから生じたものもあると分析したのである。そしてこのように幼児期の恐怖が、一生の間、われわれにつきまとうこととなる事実を重くみて、彼はこれらの不安を乗りこえるための提言を次のようにしているのである。

まずわれわれは不安の起源にまで洞察を深めて、われわれの幼児の扱い方に関する無意識的な迷信や偏見から自らを解き放す努力をしなければならない。そして人間に関する搾取にとつて、幼児期が重要な根拠を提供しているという事実をわれわれは理解する必要があるといふ。大人と子どもという不平等な関係は、男性と女性、

支配者と被支配者など、存在に関する一連の対立物の中で、その筆頭におかれる関係だからである。今日、これらの対立をめぐって、その一方の側の搾取からの解放が政治的にも心理的にも問題になっている。エリクソンは、両者の間には、思慮分別のある協力関係に基づく新しい形式が必要であると訴えている。その新しい協力関係とは、パートナーたちがそれぞれ相手の分業的機能を認め合うことであるという。それは「パートナーたちは、本質的に似通っているために対等であるのではなく、まさにその独自性のゆえに、彼らの共通の機能にとって互いに不可欠であることから、対等なのである。」（『幼児期と社会』）という彼の信念に由来する。また、先に触れた相互補完的であるという相互性の強調がその中心にあることも明らかである。

このような視点から、彼は、搾取とは果実を結ばぬ怒りに通じると考えている。つまり搾取は、それに関与するパートナーの一方が、自己の拡大のために、相手が獲得した同一性の感覚や統合を奪い取るというやり方で、

分業的機能を誤用することである。そのような搾取は相互性の喪失で特徴づけられるが、それは結局、共通の機能も破壊し、ひいては搾取者自身をも破壊させることになるからである。そこでエリクソンは、代わりに、互いに排他的な同一性に固執することをやめ、より普遍的な倫理を見いだすことを提唱する。そして黄金律をその一つの可能性としてあげている。これは心理学や精神分析学の枠を越えた主張であるが、一貫して個人と社会の問題を追求しつづけてきたエリクソンにとって、倫理の領域に踏みこまざるをえなくなったことは、当然の帰結であったと言えよう。彼自身、「心理学が貢献しうることといえ、不安に耐えることを教え、隠れた強制と搾取とを認識させることだけである」（『幼児期と社会』）とその限界に謙虚に、しかしはっきりと言及している。さらに、われわれには実験や議論の中で人間に関するデータを、まるで動物か、統計上の数字であるかのように扱いたい誘惑があることも指摘する。そしてアブローチ次第で人間はある点まではそのような存在にまで縮小され

うるといふ事実から、多くの素朴な権力意識が引出されるといふ。しかし、人間を人間自身の単純なモデルにまで縮小することによって、人間をさらに搾取されやすいものにする試みが、本質的に人間性をとらえた心理学にならうるはずはなく、それに代るものとして、われわれには人間の潜在的知性に慎重に訴えかけることしかない」と結論するのである。

さて、すでに考察したように、乳児の示す種々の反応がその親に向けられ、親がこれに答えるというような相互の刺激と反応の組み合わせの中で相互性が発達し、このようなもつとも初期の社会的経験が基本的信頼感と基本的不信感との一定の割合を乳児に体得させる、とエリクソンは想定する。この親子関係における信頼と相互作用のもつ意味は、子どもがその両親を信頼するということだけではなく、両親もまた子どもを知り信頼して、子どもの愛情欲求に答え、新しい人や事物との出会いをほげまし、むつかしい運動課題の習得を勇気づけるといふことである。そして相互性は、倫理的行為を含めて、後の

すべての効果的な行動の基本的構成要因となると考えられている。さらに、この基本的信頼感と相互性の獲得の失敗が精神的発達の障害になるとして精神科医によって注目されているが、エリクソンは、人間の思想的、道徳的、倫理的素質は、この初期の幼児経験の相互性によって決まるといふ仮説を提出している。そして、その相互性の原理が黄金律の基盤であると考えているのである。

黄金律とは、何事でも人からして欲しいと思うことは人にもまたそのようにし、人にして欲しくないことは人にもするなというキリストの山上の垂訓の一つである（マタイ伝、七章十二節）それは国や時代をこえて、古くから人々に共通の基盤をもつ道徳律であり、また多くの思想家の格言の主題ともなってきた。エリクソンは『洞察と責任』の中で次のように述べている。「黄金律は明らかに、人間存在のもつとも根本的逆説性と関連がある。各個人は自己の身体をもち、自覚した個性、自己の世界像と生死観をもつ。しかも同時に、他人と同じに知覚し、判断している現実に参加し、事実として、他人と

不断の相互交渉を行なっている。……自分の関心と他人の関心を同一のものにするために黄金律は相互に警告する。『人にして欲しくないことは人にもするな。』そして一方では勧告する。『人にして欲しいと思うことを人にもまたそのようにせよ。』心理的に訴えるために、自己中心的な思いを最小限にして、他人へは博愛的な同情心を最大限に与えようというのである。〔『洞察と責任』〕

この観点から、エリクソンは親子関係の相互影響過程を次のように言いかえている。子どもの世話をしている親は、子どもの活動性、同一性の感覚、倫理的行為の準備性を確保していくために、色々のことをしてやりながら、そうすることによって自分自身の活動性、同一性感、倫理的行為の準備性を確保しているのである。また、最初期の信頼を育む母子の相互性は出発点であり、その後、それは次第に複雑になっていくともいう。たとえば次の発達段階では、自律性を身につけようとする内部からの動きが子どもに起こる。エリクソンはこの時期の徳目として意志力をあげているが、子どものわがまま

な意地っ張りに出会って、大人はこれまで気づいていなかった自分の意志について学ばされることになるという。このように、成長過程にある子どもの発達していく徳目は、親や家族をはじめとして学校や地域や社会など、子どもをとりまくさまざまな人々の徳目と相互にがっちり組み合わせられていると想定されている。

そして黄金律について、特に次の点が強調されている。「この中において、各人は、本当に価値のあるものは、行為をする当事者と相手との間の相互性——他人を強化しているにもかかわらず、自身をも強化するという相互性——を一層拡大していくという経験をうる。このように行為の当事者と相手とは一つの活動におけるパートナーなのである。人間発達の光に照らしてみると、行為の当事者は自分の年齢、発達段階、条件に見合う徳目を、他人の中に生み出そうとしている時でさえ、自分の年齢、発達段階、条件に見合う徳目を自分の中にも生み出すということになる。このように考えると、黄金律は次のようになるであろう。「他人を強化する時でさえ、

自分を強化するものを他人にすることが一番である。つまり自分自身をのばすものであれば、他人の最良の可能性をのばすであろう。」(『洞察と責任』)

この関係は、親子関係以外の、たとえば男性と女性、教師と生徒、医者と患者というような、それぞれに役割の分化した関係の中にもあてはめてみることができると考えられている。

ちなみに、男女の機能の違いは次のようにとらえられている。

性の衝動と愛とを結びつける性器に関するフロイト理論の中心には、相手の力や可能性を引き出そうとしていながら、同時に自分自身の力や可能性が引き出されるという相互性の概念が示されているとエリクソンは指摘する。つまり、そこには、男性は女性をより女性たらしめる時により男性となり、その逆もまた正しいという考え方、また、お互いに異なったユニークな存在であることがお互いに自分のもつ独自性を高めることになるという考え方が示されているというのである。

エリクソン自身は、男女の差異を単に解剖学的なものとしてとらえているのではなく、二つの性の間には心理学的な差異があると考えている。そして黄金律を修正して、「二つの性は異性の独自性を拡大するものである。またお互いが本当にユニークであるためには、同等にユニークな相手との相互性を基盤としなければならないということになる。」(『洞察と責任』)と述べている。先に触れた、バートナーがお互いの独自性を強調することは、決して不平等性を強調することにはならないという彼の主張は実はここに由来することが明らかとなる。また、彼は、女性が男性と同じ仕事ができることによって男女平等を訴えるかぎり、それは本当の女性の解放にはつながらないのではないかという。むしろ仕事を女性自身に適応させることによって人間としての真の解放をめざすべきであるという。その意味ではすべての人間が解放されなければならないのはいうまでもない。したがって、女であろうと、男であろうと、またどのような能力の持ち主であろうと、誰もがもって生まれた、いわば運

命的なものすべてを自分の同一性として主体的にとらえ、自分に適した独自のなやり方で社会に参加していくことこそ大切であるという。そこには、統合的なヒューマニズムの問題として男女の問題をとらえようとする彼の姿勢がうかがわれる。同時に、すべての人間が自分に適したやり方で社会に参加することができるように社会環境をかえて行く努力をすることが今日の課題であることがわれわれに対して示唆されている。

では夫婦関係の相互性はどのようにとらえられているのであろうか。結婚生活における男女は普通、分業と協力の体制をとる。エリクソンによれば、男女の間で、コミュニケーションをすすめ、協力をはかる能力や人格的徳目においては差異は少ない。しかし、たとえば家庭という共同生活において必要な役割を引き受けたり、生殖において男女がそれぞれ異なった役を引き受けたりする領域では、その差異も著しいといえる。したがって、男女は、自我機能の領域では、もっとも性差が小さいので、この自我機能を働かせることによって性的な相互性

と両極性を統合しえなければならぬであろうと想定されている。

また、彼は愛は人間の徳目の中でとくに大切なものであるが、成人の愛は、異なった機能の中にある対立したものを永久におさえていくお互いの尽力であると定義している。夫婦生活においてはエリクソンのいうそのような愛が一層必要とされるであろう。エリクソンはまた、性生活を通して夫婦の間で「二人の人間の相互調整というものが最高度に経験されるときには、男性と女性の対立や、事実と幻想、愛と憎しみなどの対立から生じる敵意や怒りの烈しさがそがれる。……こうして性というものに以前ほどつきまとわれなくなり、過剰補償はそれほど必要でなくなり、サディスティックな支配が無用となる。」(『幼児期と社会』)と述べている。この考察は、心身の相互性がうまくいっている夫婦には国境をこえてそのままあてはまると思われる。

さらにエリクソンは、このように親子関係や男女関係について述べたことが、医者患者関係や国際関係にも適

用できると考えている。すなわち、医者の特門とその技術を通して、それぞれの仕方、患者は患者として、人間として治療をうけていながら、同様に医者は実際の医学者として、人間として成長していくという。国際関係についていうならば、国家を、政治的、技術的、経済的成長過程のそれぞれ異なった段階にある統一体としてとらえ、国家間の不平等を無視するというのではなくて、むしろ歴史的な差異からくる独自性を尊重しようとして提案する。そして国際間の相互性を維持することを各国家の課題として共に考えようという。なぜなら「軍備拡張競争にとって代わるものはただ、未来の共同の同一性に向って、自分の国家を発展させる人々を強化しながら、これまで自分の国家を強めてきたものを、相手国家の中にもひきおこしていく努力しかないように思う。このような仕方でのみ、はげしく移りかわる技術的世界と歴史の中に、お互いに共通なものを見出すことができ、過去の遺産としての勝利と敗北、征服と搾取という危険なイメージを乗り越えることができるからである。」(『洞

察と責任』これは、けっして目新しい主張ではない。しかしエリクソンがここであえて強調したいのは、この相互性の理念をわれわれがお互いに納得しあうことの必要性であろう。その相互性に支えられた連帯の中で、お互いの独自性を尊重しつつ、共に生きる新しい可能性を止揚する努力をすることを、彼は静かに、しかし真摯に主張しているのである。

以上で、エリクソンの自我発達理論の考察は終る。この理論を反映させて、わが国の、とくに大学生の人格の発達の様相の観察と考察をまとめることがこれからの私の課題だと考えている。

||了||

※

※

昔の味

福田 理恵

『幼児の教育』のカットをお引き受けして早いもので三年目になりました。結婚生活四年目、週二日大学の助手の仕事以外はほぼ家庭中心の日常です。そんな生活の中で、私を感じていることをお話ししましょう。

「料理は作ってみるのも楽しい、食べるのはもっと好き」と家庭を持つ以前、よく思ったことでした。ところが実際に家庭生活を営み始め、子供が生まれてからというもの、こんなにもお金と時間と労力のかかるやっかいなもので、重荷にすら感じて出来ることなら食べることを省略したいとさえ思うようになっていました。だからといって気軽にやめることも出来ず、家族の健康を守る為に栄養面を気付かう手作り派でありたいと思うのです。こんな矛盾に悩みな

がらよい解決法はないのかと台所仕事を考え直すことにしてみました。まずは研究家諸氏の意見を図書から探してみると、なる程先輩家庭人たちの素晴らしい知恵に驚嘆し触発されてさっそく合理化プランを実行することになりました。下準備・ゴミ処理・掃除を合理的に考え手間を省き、又料理は時間がかからず出来るものを種類別にレスピカードを作って整理するなど工夫をこらすうち、苦であった台所仕事が有意義にさえ思えるのでした。いろいろな情報を集めていると省こうとしていた自分のエネルギーが台所を中心に食生活を考える方向へどんどん注がれていることに我ながら驚きを感じます。

食生活を健全に保つことは体の健康を守ると共に人との心の豊かさを培う為、重要であることが解っていたながら都会派現代人の忙しさがそうさせるのでしょうか、健全さを欠く傾向にあります。時間の余裕を得る為のさまざまな工夫が流通食品関連企業のお膳立ての上にあの手この手で進められています。それぞれの善悪を問う間もなく、私たちの食生活はこれらの企業の仲立ちなく成り立たなくなっているのも確かなことです。

日本人の中には「食は明日のエネルギー」のみと考え、食べものについて表立ることや、時間・労力をおしませ費すことを嫌う傾向があります。簡単に食事を済ませ、他にしなければならぬとくさんのことに一生懸命な日本人には必然なことなのでしょう。現に私も食生活の合理化を真剣に考えているのですから。

子供の世界はどうでしょう。彼らは流通食品企業の大きなターゲットとして捕えられ、食生活での国際的にかつアツシヨンを素直に受け入れています。具体的に言えば昔ながらの米・みそ・醤油・酒などの旨味より国際的な洋風の味、マヨネーズ・ケチャップ・バター・粉の旨味をより好んで受け入れているのです。実際後者は日本の味覚にまるやかさと変化をあたえているといえるでしょう。幼年時代から米食中心の野菜・みそ・醤油で育った人々ととり、この新しい味に素直になれないでしょうが、だからといって昔の味の単調な変化に乏しい戦前型食生活に逆もどり出来ないでしょう。なぜなら日本人の旨味に対する反応が多様化して豊かになっているからです。そうかといって昔ながらの味を切り捨て、新しく日本の味として定着し

た洋風な味を最も日本的な味として言いきることは可能でしょうか。少なからず子供はその洋風化の食生活の真只中に置かれている現在、米・みそ・醤油が過去の味になろうとしている予想はつきます。

日本料理が料亭の味になり、高級化が進みもはや一般大衆の日常料理でありえない今日、現代日本人の食生活は国際化の方向へ進まざる得ないことを米・みそ・醤油の良さを知っている人々は悲しい現実として受け止めるだけでよいのでしょうか。私は若い世代の母親達がこれら昔ながらの旨味について理解を深め、現代的に生かす工夫を願わずにはいられません。

米国では醤油クッキングの流行、日本型食生活への見直しが話題にのぼっています。それらが逆輸入の形でにわかには日本の食生活を考え直そうとする動きが一部にあるようですが、あくまでこれら日本人ながらの味が和風西洋料理化されるのではなく、現代日本料理として独立してほしいと思います。次の世代を担うわが子には日本固有の旨味をなじませて、好きになってもらうよう、私なりに努力したいと思っています。

ニュージーランドにおける

就学前教育の歴史ならびに現状 (二)

松川由紀子

(3) ウェリントンの子ンダーガルテン

ウェリントンにおいても、社会的必要からキンダーガルテン運動が着手され、一九〇五年、ウェリントン・フリーキンダーガルテン連合（後の協会）が結成された。

指導者のリッチモンド嬢 (M. Richmond) は、

ウェリントンのフレイベル会の会長であった、彼女は路上で、ほこりだらけの汚い舗道のごみにまみれてあちこちにすわって、明らかによくない言葉を習っている、学校に行くにはあまりにも幼い子どもたちを見た。このような放っておかれた幼児たちを見て、彼女のやさしい母のような心は痛ん

だ。「こうした子どもたちのためにキンダーガルテンを設けなければならない」と彼女は述べ、そのための仕事にとりかかったのであった。⁽⁸⁾

リッチモンド嬢は、一九〇五年、三〇回以上も午後四時三十分から五時三十分まで、キンダーガルテンの必要を話し、資金集めのための計画をたてた。もともとの計画は、試験的なキンダーガルテンを三年間、支えるためのものであった。政府への働きかけを最初から考えていた（なお、ウェリントンはすでに当時から首都であった）。一九〇六年、（ヴィヴィアン通りのパプチストの教室に、そして

三カ月後に) トーリー通りのミッションホールに、バンクス嬢の指導下、一名の学生の助力の下に、試験的なキンダーガルテンが設けられた(一九〇九年にはタラナキ通りの教会ホールに移り、翌年には付近のある建物の二階が賃借された)。開園の日は十三名の幼児が参加したが、二週間で三十八名に増加した。リッチモンド嬢は、このキンダーガルテンを政府に引き受けさせようと働きかけたが、譲り受けられるべきではないとされた。⁽⁹⁾しかし、一九〇九年、教育省は、任意のキンダーガルテンに関する政策を定式化し、キンダーガルテンを承認し、監査し、助成金を交付することを認めた(政府は、一ポンド募金につき一ポンドを助成した)。

ウェリントンの初期の協会の組織は、数名の専門家教師と事務所保持者からなる事務局、婦人たちの財政委員会、高い地位の紳士たちからなる助言委員会があつて、会員のさまざまなタイプの財政的寄付に基づいていた。財政委員会は、二〇名の地区リーダーからなつており、そのリーダーの資格が与えられるためには十五名の准会

員をみつければならなかつた。准会員は、年に一ポンドを寄付する約束をした者であつた。この一ポンドは、年に二シリング六ペンスを支払う支持者、八名から集めることができた。初期の覚え書きには、地区リーダーになつたのは誰で、准会員から支払われた金額はいくら、などの記述で先占されていた。

資金獲得とともに執行部の関心があつたことは養成学生数であつた。学生は養成費用を支払わねばならなかつたために応募する者は少なく、それ故、受け入れる幼児数も制限され、多勢の補欠人名簿(ウェイティングリスト)となつた。つまり、一九一一年、フリーマン嬢からウェリントンのキンダーガルテン教師養成所の所長に任命され、組織的な養成が組まれるようになったのだが、当時は、学生一名につき十二名の幼児を受け入れていたので、学生数によって幼児数が決定されていた。そして、幼児数は、人頭補助金制度下の政府補助金を決定した。一九一四年より幼児ひとりあたり二ポンドの均等割の助成金が交付されていた。⁽¹⁰⁾その後、助成金は、十七年

には二ポンド一〇シリング、十九年には三ポンド二シリング六ペンスと増加した。そのため、養成学生数は重要な問題であったわけである。当時の学生は、午前中はキングダーガルテンで教師を助力し、午後は講義を受けていた。リッチモンド嬢は、こうした学生たちについて、「公立学校教師として資格をとることのできない多くの少女は、キングダーガルテン学校に要求される忍耐ならびに母性の資質をすべて持っている」とみて、「援助を要する母親たち、養育を要する子どもたち、母性的なやり方で養成を要する少女たち、この三者の必要にキングダーガルテンは貢献する」と述べたが、実際的には、キングダーガルテンの幼児たちの世話の多くをこうした学生たちによりかかっていた。

一九一五年までには、四つの地区にキングダーガルテンが設立され、これらはともにリッチモンドキングダーガルテンとして知られていた。一九一七年、協会の名称がリッチモンドフリー・キングダーガルテン連合（一九一一年に改称）からウェリントン・フリーキングダーガルテン協

会に改称された。翌年、協会は、タラナキ通りの工場を購入し、校舎に改造して、百名の幼児ならびに養成学生のための独自の建物を得た。このタラナキ通りキングダーガルテンは、一九六二年までウェリントンにおけるキングダーガルテン教師養成所であった。

ちょうどこの頃、キングダーガルテン教師として養成され、その後三〇年間もキングダーガルテン教師として働いたスコット嬢 (T. Scott) が、当時のキングダーガルテンならびに教師養成について回想している記録が残されている。当時の様子を生き生きと具体的に伝えているので、次にこれをみてみたい。⁽⁴⁾

一九一四年、スコット嬢が女学校四年に在学していた時、キングダーガルテンに関心のある女生徒と話すために、リッチモンド・フリーキングダーガルテン連合会長のライリー嬢が来校した。スコット嬢は興味を感じたので、友人のレイク嬢とともにライリー嬢に会い、そしてタラナキ通りのキングダーガルテンを訪ねたのだが、あま

りの貧民区にショックを受けるのであった。

両親を説得して、翌一九一五年、十六歳の時、レイク嬢とともに二カ年の教師養成を受けることになった。同期の学生は五名で、その出身階層はまちまちであった。

養成費用は無料であったという。多分、連合が何らかの方法で費用を工面していたのであろう。学生たちは、午前は四つのキンダーガルテン（タラナキ通り、ブルックリン、マラヌイ、南ウエリントンにあった）で働き、午後はタラナキ通りキンダーガルテンで講義を受けた。当時の養成コースの科目は、児童本性の知識、自然研究、キンダーガルテン原理ならびに実際、クラス教授、板書、歌唱、英語ならびに教育史、水彩、包帯のしかた、幼児の一般的な保育（衣、食、睡眠など）、手工などであった。

一九一八年、養成コースを終えた五名のうち、スコット嬢を含む三名がタラナキ通りキンダーガルテンの共同の責任者（教師）に任命され、その九月、キンダーガルテンは工場を改造した独自の園舎に移動した。その後、

スコット嬢はあちこちのキンダーガルテンで働いたが、一九二四年、再びタラナキ通りキンダーガルテンに教師として任命され、退職の年（一九四八年）までその地位にあった。

当時の保育はどのようなものであったのだろうか。朝八時半にすでに子どもたちが登園し、どぶにすわって教師や学生たちが来るのを待っていた。まず朝の歌から始まり、それからお話（当時は絵本は使用されていなかった。）、そしてブロックや図画（当時はぬりえ）などの手仕事をした。ほとんど毎日、フレレベルの遊具をひとつ用いたという。第一ならびに第二の遊具は、教師がいろいろ動かして、その動きを示し、子どもたちはそれで形や色の学習をした。第三、第四の遊具は、教師の指示通りに使用するようになされていた。複雑なフレレベルの遊具は、片づけるのに時間がかかるので使用されなかったし、モンテッソーリの教具も若干あったが、あまり役に立たなかったので用いられることは少なかったとい

う。子どもたちはよく管理されていて、教師の指示に従わなければならず、従わない子は孤立させられた。

キンダーガルテンが賃借の建物にあった頃は、園庭がなかったので、学生たちがよく散歩に連れ出した（一〇時から十二時まで）。子どもたちは年少、年中、年長に分けられていて、特に年長児（四歳児から五歳児の頃の者）はよく遠出の散歩をした。駅や飛行場、消防署、警察署、搾乳場などへ社会勉強を兼ねて行った。帰り道、兵舎の前を通った時、兵士たちがりんごやパン、ジャムなどをくれた（当時は戦時中）。

子どもたちは順々に当番になり、エプロンをしてテーブルをふき、りんごやラスクを配ったりした。ラスクは教師や学生たちがパン屋からパンを購入して、焼いて作ったものである。降園時になると輪になって、国王陛下万歳を歌い、教師と握手をしてから帰った。

家庭訪問もよくしたらしい。週一ペニー寄付できるかどうか母親に尋ねたという。酒飲みの父親のいる家庭の子どもには特別の保護が必要であったし、必要以上に厚

着をさせている中国人の子どもたちや全く不潔な子どもたちもいたので、母親たちと話し合うことはとても重要な教師の任務であった。

また、キンダーガルテンに対する理解を幅広く得るために、一九一八年にはキンダーガルテンの実演が町のホールでなされた。そして、この年の十一月にはインフルエンザが流行し、すべてのキンダーガルテンは休園され、教師や学生たちは教員養成大学に行き、プランケット看護婦の指示を受けて乳児の世話をした。

以上が、スコット嬢の回想である。なお、新しいタラナキ通りキンダーガルテンにはすばらしい園庭があったが、これは地区のすべての子どもたちに開放された。そして、一九一八年、所長は教育的、社会的機能をもつ母親クラブを組織した。タラナキ通りを除いた各地区のキンダーガルテンでは、親たちが、ラスクの資金に対する寄付という形でしばしば運営経費を助した。⁽²⁾以後、キンダーガルテンの発展は親たちの力によるところが大き

くなつていったが、それは、全国的な傾向になつていった。

(4) オークランドのキンダーガルテン

一九〇四年、オークランドのキンダーガルテンは、(既述の四都市のキンダーガルテンと同様に) 政府より助成金を受けた。⁽¹³⁾ すでに当時、私的なキンダーガルテンがいくつかあつたようだが、記録は残されていない。

一九〇八年に、オークランド・キンダーガルテン協会(後のオークランド・フリーキンダーガルテン協会)が設立され、翌年、第一回の年次会議が開催され、最初のフリーキンダーガルテン設立に対する関心がマイアーズ夫人(U. Myers)によって高められた。そして、一九一〇年、ヴィクトリア公園内のクリケット仮小屋にてローガン・キャンパベルフリーキンダーガルテンが開始され、数カ月後に、ローガン卿ならびにキャンパベル嬢の寄付によって同公園内に専用の園舎が建てられ、そこに移動した。その時、公の会議が開かれ、マイアーズ夫人

が演説をしてキンダーガルテンの必要を述べたのだが、それがニュージージーランド・ヘラルド紙(一九一〇年一月二〇日付)に報道された。

……オークランドには、ぶらつき者や節約心のない人、落ちぶれた人や金使いの荒い人たちのいる地域には避けられない、スラムの子どもたちがありました。直面する問題は、この幼い放つておかれた子どもたちが不健全な環境に生活するままにしておくべきかどうかでした。こうした子どもたちのある者は、父母が仕事に出かける間、通りや騒々しい裏庭に投げ出されたり、汚い台所に閉じ込められたり、故意に放置されるか放つておかれたりする運命にありました。フリーキンダーガルテンは、そうした子どもたちを明るくより品のよい環境に入れて自然な発達によって子どもたちの性質の最上のものを導き出して、自尊心のある、勤勉な子どもたちにするための手段を供給しようとするのであります。⁽¹⁴⁾

オークランドにおいても、こうした恵まれない子どもたちのためにフリーキンダーガルテンが設立されていったのだが、一九〇八年の協会の年次報告では、協会の目的として次の二点をあげている。⁽¹⁵⁾

①親たちが教育費の支払いのできるところの子どもたちのために、オークランド郊外にキンダーガルテンを設立することを援助すること

②貧しい子どもたちのためのフリーキンダーガルテンを町中に設立すること

当時、すでに私的なキンダーガルテンは設立されていた。その後の協会の記録には、私的なものについてはみられなくなった。このことは、協会の運動の中心が②に向けられたことを示している。一九一二年、一三年に第二、第三のフリーキンダーガルテンが開園された。

オークランドでは、最初のフリーキンダーガルテンが設立される以前に、すでにキンダーガルテン教師養成がなされていた。⁽⁶⁾一九〇九年、七名の学生は、オークランド教員養成大学と技術学校の講義に出席し、実際的な知識は、シドニー教員養成大学の卒業生によって経営されていた、二カ所の私的な協力のキンダーガルテンにおいて得ていた。翌一九一〇年には、英国の全国フレール連合の上級免許状をもっていたギブソン嬢 (M. E.

Gibson) がキンダーガルテン教師養成所の所長に就任し、一年生八名、二年生七名が教師養成を受けた。

養成所の場所は、当初はクリケット仮小屋のローガン・キャンペルキンダーガルテンであったが、年末にはその新築の園舎に移り、一九一六年にはアイアーズキンダーガルテンに移った。一九一〇年、一年に免許状を得た十五名の卒業生は、四名が他の町で私的なキンダーガルテンの教師の職につき、数名は私的なキンダーガルテンを開設したという。

以上、ダニーデン、クライストチャーチ、ウェリントン、オークランドにおける初期のフリーキンダーガルテンについて述べてきた。ニュージーランドのキンダーガルテンの歴史は、それぞれの協会の歴史であるが、これら四都市がその中心になっていて、その後の歴史をつくり上げている。これら四つの協会に共通することは、恵まれない子どもたちのための社会的必要からフリーキンダーガルテン運動を始め、そしてただちに教師養成を組織していったことがある。ダニーデンにおいては記録が

残されていないので、正確な時期はわからないが、一九一一、一二年頃だと思われる。⁽⁸⁾

なお、南部のインヴァーカールでは、病後ならびに入院中の母親をもつ子どもたちのために、キンダーガルトンの設立が主張され、委員会が設置され、一九二一年に最初のフリーキンダーガルトンが設立された。

その他の地域においては、フリーキンダーガルトンの設立は、そのほとんどが一九四〇年代以降である。私的なキンダーガルトンはいくつもあったようであるが、記録は残されていない。

では、次号に、一九二〇年代以降のキンダーガルトン運動の発展についてみてみよう。(山口女子大学)

註

(8) Lockhart; *op. cit.*, p. 95. 以下の記述もこれを参照した。なお、一九〇四年、政府は、オークランド、ウェリントン、クライストチャーチ、ダニーデンの四つのセンターで割けるように五〇〇ポンドを助成した (Downer; *op. cit.*, p. 14)。これは、政府によるキンダーガルトン運動に対する助成の最初であった。このことは、ウェリントンにおいてすでに何ら

かのキンダーガルトン運動が展開していたことを示しているが、記録は残されてゐない。

(9) Anne Meade; *An Organizational Study of the Free Kindergarten and Playcentre Movement in New Zealand*. Unpublished Ph. D. thesis in Sociology, Victoria University of Wellington, 1978, pp. 114-115. 以下の組織面等の記述もこれを参照した。なお、著者は、ウェリントンのヒューギラード教育研究諮問機関の幼児教育部門の主任研究員である。

(10) Downer; *op. cit.*, p. 14.

(11) Geraldine McDonald (comp.); *An Early Wellington Kindergarten*, as described by Ted Scott, Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1975. なお、編者は、ヒューギラード教育研究諮問機関の幼児教育部門初の研究員当時で、現在は副所長。

(12) Meade; *op. cit.*, pp. 115-116.

(13) 註(8)を参照のこと。

(14) David Barney; *Who Gets to Pre-school?* Wellington: New Zealand Council for Educational Research, 1975, p. 53. なお、著者は、オークランド大学の教育心理学の上級講師 (当誌)。

(15) *Ibid.*, p. 53.

(16) Lockhart; *op. cit.*, pp. 11-12. 以下の記述もこれを参照した。

(17) Meade; *op. cit.*, p. 100.

四歳児における動物あそびの生態

——動物あそびの発生・分化・変容の分析——

宇田 真由美

【研究のねらい】

四才児の遊びを見ると、ねこや犬などの動物になつて遊ぶ「動物あそび」が頻繁にみられます。本研究では、四才児の動物あそびの生態と、この遊びの発生要因を家庭環境の調査を通して明らかにすることを、目的としています。

一、「動物あそび」の生態については、次の三点からみていきます。

① 「動物あそび」をする子どもにおける遊びの出現頻度

② 「動物あそび」の進化の仕方

③ 「動物あそび」をする頻度の高い子、低い子の遊び方の傾向

二、「動物あそび」の発生要因については、家庭環境との関連で、次の三つの点について考えてみます。

① 動物との直接体験と「動物あそび」が関係あるのではないか

②家庭での「動物あそび」の許容度が、子どもの遊びの出現頻度と関係しているのではないか

③安定した友達関係と「動物あそび」が関係しているのではないか。

【研究方法】

昭和五十七年四月から昭和五十八年一月末までの参加観察記録の中から、「動物あそび」の記録すべてをとりあげて分析しました。記録日数は十ヶ月で二十七日間におよびましたが、観察記録は総数三十八でしたので、これらを分析の資料としました。

【結果】

一、「動物あそび」の生態について

①遊びの出現頻度

四月から一月末までに、合計三十八の「動物あそび」が出現しましたが、これに参加した子ども的人数は二十六人中二十四人でした。このことから、クラスのほとん

どの子どもたちがこの遊びに参加していることがわかります。ただし、遊びの出現頻度には個人差があり、十八回から〇回までみられ、平均すると五、一七回でした。

「動物あそび」の出現数から、全体を3グループに分けて集計すると、表1のようになります。出現頻度が八回以上の子どもをA群、四～六回の子どものをB群、一～三回の子どものをC群とすると、A群が五人、B群が十一人、C群が八人で、「動物あそび」を一度もしたことのない子どもが二人で

表-1 「動物あそび」の出現頻度 (四捨五入)

	出現頻度	人数
A群	8回以上	5人 (19.2%)
B群	4～6回	11人 (42.3%)
C群	1～3回	8人 (30.8%)
	0回	2人 (7.7%)
合計		26人

た。このようにみていくと、この十ヶ月で「動物あそび」をしたのが四、五回というグループが最も多いことがわかりました。

②遊びの進化について
「動物あそび」がどのように進化するかをとら

表-2 動物あそびの活動場所とその内容

学 期	月 日	曜 日	グ ル ー プ 番 号	活 動 場 所				活 動 内 容								
				A 不 定	B よ り 処 あり	C 一 定	D 基 地 か ら 外 へ	イ 動 き 回 る	ロ 動 物 ら し く 動 く	ハ 付 属 品 を 身 に	ニ 食 事 を す る	ホ 生 活 場 面 を 演 じ る	ヘ ハ プ ニ ン グ が 起 き る	ト 出 か け る	チ 基 地 を 作 る	リ 他 の 活 動 を す る
1	6/24	(木)		○				○		○						
2	9/6	(月)			○			○	○		○					
	7	(火)	①		○		○	○	○					○		
			②		○			○	○							
	8	(水)	①	○				○	○							
			②	○				○	○							
	9	(木)			○			○	○							
	10	(金)			○			○	○							
	14	(火)					○						○			
	17	(金)				○				○						○
	20	(月)				○									○	
	21	(火)						○			○			○		
	10/6	(水)		○						○						○
	26	(火)					○			○						○
	27	(水)				○				○						
11/22	(月)						○							○		
26	(金)						○						○			
30	(火)		○								○		○			
3	1/11	(火)	①		○			○	○	○		○		○		○
			②	○				○	○			○				
	12	(水)	①	○				○	○			○				
			②	○				○	○			○				
	13	(木)		○				○	○			○				
	14	(金)				○			○						○	
	17	(月)				○			○				○			○
	18	(火)						○	○						○	
	1/20	(水)	①				○		○						○	
			②				○		○						○	
	21	(金)				○			○				○		○	○
	24	(月)	①			○			○						○	○
			②					○						○		○
	25	(火)	①			○			○						○	○
		②					○							○	○	
26	(水)	①	○					○							○	
		②	○	→	○			○							○	
27	(木)						○								○	
28	(金)	①					○								○	
		②													○	
				A	B	C	D	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ

※ 太字は各学期の第1週めをあらわす

えるために、いつ、どこで、どのような内容の動物あそびが、どんな役割をとって行なわれたかを表2のようにまとめてみました。この表は、縦軸に「動物あそび」が出現した日にちをとり、横軸に活動場所と活動内容を記号で記入してあります。

活動場所のAとは、場所が一定しておらずあちこち移動する場合で、Bは、ちょっとしたより処はあるがほとんどあちこちに行っている場合です。たとえば、走り回ったあと「家」と名づけられた場所へちょっと寄り、またすぐに出かけるといったものです。またCは、基地の中で活動するもので、ままごとコーナーの中で動物あそびが行なわれるような場合です。遊びの中心は基地ですが、そこから出かけることもするというもので、ままごとコーナーでごちそうを食べたあと、散歩に出かけるといったものです。

活動内容の記号の「イ」というのは、あちこちただ動き回ること、「ロ」はその動物らしい動きをすること（泣く、なめる、飛ぶなど）、「ハ」は首輪やスカートなどの

付属品を身につけること、「ニ」は食事をする事、「ホ」は生活場面を演じること（ふとんに寝る、たばこを吸うなど）、「ヘ」はケガや迷子などハプニングが起きること、「ト」は散歩、買物などに出かけること、「チ」は基地作りのための動きで、積木で囲いを作るとか、基地の中で使うものを運ぶなど、「リ」は粘土で遊ぶ、病院ごっこをするなど、他の活動と結びついたものを意味しています。

この表から気づくことは、まず第一に「動物あそび」が出現した日にちです。九月、一月といった休みあけに多くみられる傾向のあることが伺われます。

次に活動場所についてですが、休みあけ直後の一週間（表の中で日にちを枠で囲った部分）は、活動場所が一定しないことが多く、その後、基地を中心とした活動へ移行していくことがわかります。また活動内容については、事例によって多様であり、参加メンバーの特徴、友人関係、活動経験、動きの好み、遊びのとらえ方などによって様々なようすを示すことがわかりました。

表-3 動物あそびの役割

社会的役割		な い	ある
関係の質			
群	①同質 (同じ種類の動物)	9/6、9/7②、9/8①、9/17、10/6、11/22、1/20②、1/28①、1/28②	1/18、1/24②、1/25②
	②同質異種 (違う種類の動物)	9/8②、9/9、9/20、10/27、1/27	
	③異質 (人+動物)	9/14、1/14	1/20②、1/21、1/24①、1/25①
対	①飼い主③動物	6/24、9/7①、1/11①、1/12①、1/12②	1/13、1/20①
	②飼い主③動物+人や他の動物	9/21、1/11②、1/17	11/26、11/30
その他		1/26① (1人で活動)	10/26 (犬ねこ病院ごっこ)
不明		9/10 (内容が明らかでない活動)	

表3は、「動物あそび」がどのような役割関係をとって展開しているかを示したもので、縦軸に役割関係の基礎単位の性質を示してあります。すなわち、動物あそびが「むれ」を作っているのか、「つい」をなしているのか、その他なのか、不明なのか、四つの項目に分けられ、「むれ」はさらに、①同じ種類の動物のむれ、②違う種類の動物のむれ、③人間と動物のむれ、の三つに分化してあります。また「つい」についても、①飼い主と動物 ②飼い主と動物とそのほかに人間や他の動物がかかるもの、という二つに分けてあります。

次に横軸ですが、これはそれぞれの役割の性格が、社会的役割の有無で分類され、社会的役割がある場合は、「ミミ」という名前といった固有名詞や、「警察犬カール」というようなテレビのキャラクター、「おかあさん」や「一番上のおねえさん」といった家族内の序列、「看護婦さん」といった職種が与えられている場合です。そしてこの表には、それぞれの項目にあてはまる事例を、日にちで記入してあります。この表から、どのよう

表一 4 動物あそびの出現頻度と活動内容との比較

㊦ 保育者

A 群 の 子ども		C 群 の 子ども	
E の 活 動 内 容	S の 活 動 内 容	A の 活 動 内 容	Si の 活 動 内 容
4月	4月	4月	4月
5月	5月	5月	5月
6月	6月	6月	6月
7月	7月	7月	7月
8月	8月	8月	8月
9月	9月	9月	9月
10月	10月	10月	10月
11月	11月	11月	11月
12月	12月	12月	12月
1月	1月	1月	1月
▲四つんばいになって歩く ○首に毛糸を巻かれる(首輪) ○他の子といっしょにふとんに寝る ○チークのくさり(毛糸)を持ち、つれて歩く ○他の子といっしょにタオル、スカートを身につけたり、1枚の紙に絵を描く ○他の子といっしょに積木の船に乗り、ごちそう(Bブロック)をもらって食べる ○追いかけっこをする ○ねこになりきって遊ぶ真似をする ○他の子といっしょにはだしになってすべり台を登り降りしたり、箱ブランコにのる ▲木でできた小さな車をすべらせる ○ねこになりきって他の子とおしゃべりしたり、なめ合う ○㊦の足をなめたり、ひざに乗ったり、くすぐる ○他の子から食物をもらって食べる ○ニャーニャー泣いたり、ねこ語で話す ○積木で作ったおふろで遊んだり、ベッドに寝たり、積木の上からとぶ ○「入れて」という子に「ダメ」という ○他の子をつれて歩いたり、いっしょに絵本を見たり、ごちそうを作って食べさせる ▲梓積木の穴の中へもぐる	▲毛糸を首に巻く ▲四つんばいになって歩く 「ガオーッ」と泣いたり、「ワオーッ」とうなる ○他の子につれて歩かれたり、積木で作った囲いの中に入るようにいわれてそうする ○他の子といっしょに泣き合ったり、じゃれ合う ○うつぶせに倒れ、医者役の子にみてもらい「治った」といわれ起きる ○他の子がくれたブロックをくわえる ○他の子と相談して迷子になる ○他の子にブロックで作ったピストルで撃たれて倒れるが、くすぐられて目をさます ▲Bブロックを入れるカゴの中に頭をつっこむ ○「ワーッ」といっておどかさ ▲いろいろな物を食べる、(セロテープ台、タオルかけなど) ▲机の下にもぐったり、四つんばいでじっとしている ▲足をかけたといつて倒れる ○㊦にタバコ(白い棒)をくれたり、足をかもうとする ▲赤ちゃんライオンらしくフニャフニャ歩く	㊦に誘われ他の子や㊦のあとについて走ったり、他の子の真似をする 10月 11月 12月 1月	㊦の子2人と いっしょに ままごと コーナーに いる

な役割関係についても、社会的役割を付与した遊びが一月に集中していることがわかります。

③ 遊び頻度の高い子、低い子による遊び方の傾向

表4は、遊びの頻度と遊び方の違いを明らかにするため、遊び頻度の高いA群から女兒Eと男児Sを、また遊び頻度の低いC群から女兒Aと男児Sをとりあげ、その活動を四月から順に記したものです。その遊び方をみると、C群のAは、保育者に誘われて参加し、Sはただ他の子と同じ場所にいるという参加の仕方であり、二人とも消極的なものでした。一方E、Sは共にA群に属していますが、その遊び方は著しく異なっていて、Eでは、「いっしょにエサを食べる」「追いかっこをする」など、他の子どもとのかかわりのある活動(表の○印)が多く、特に一月以降、「他の子をつれて歩く」「入れて」という子に「ダメ」というなど、活動の中でリーダーシップをとることがふえています。しかしEに比べてSは、一人での動き(表の▲印)や他の子からの働きかけに答える受動的な動きが多くみられます。このことか

ら、「動物あそび」の出現頻度が高くても、そこには個人差もかわってくるということがわかります。

二、「動物あそび」の発生要因について

動物あそびの出現には、①家庭における動物との直接体験 ②動物あそびの許容度 ③安定した友達関係、という三つが関与しているのではないかとこの観点から、家庭での遊びの調査をクラス全員の母親を対象に実施しました。その結果を要約したのが表5です。この表から、遊び頻度の高いA群の子どもたちの場合には、①から③の項目それぞれを十分に経験していることがわかりました。しかし、遊びの頻度の低いC群の子どもたちの場合には、三つのそれぞれの項目について、A群の子どもたちより経験が少ないことがわかりました。

【考察】

まず第一に、「動物あそび」が休みあけに多く発生することから、子どもたちは動物あそびの形をとって園生活という緊張した場面に適応を計っているのではないかと思われる。逆にいえば、この遊びの出現によって子

表-5 家庭での遊び調査の結果

(四捨五入)

主な調査項目		A群	B群	C群
① 動物との直接体験	●動物が好きなお子	100%	100%	85.7%
	●動物に直接ふれる機会のある子	100%	100%	85.7%
② 動物遊びの許容度	●家で動物あそびをしている子	100%	100%	57.1%
	●動物あそびを認めている家庭	100%	100%	(動物あそびを している子の うち) 100%
③ 安定した友達関係	●近所に友達のいる子	100%	88.9%	71.4%

どもたちが自分が安心して取組める活動の場所、仲間、内容を求めて彷徨する状態を、保育者が予知できるのではないかと考えられますが、今後注意深い観察の必要なところですね。

次に「動物あそび」の形態ですが、一定の進化の方向をとると思えます。たとえば表2からわかるように、「活動場所」については最初は不定の場合が多く、その後一定の場所を基地として、そこ

を中心に展開することが多くみられるようになります。

また「役割」についても表3のように、最初は犬やねこそのものを演じるなど機能的役割のみだったのが、しだいに「おかあさんねこ」とか「警察犬カール」といったように、社会的役割が付与されたものへと変化していきます。このことから、子どもたちの動きや役割のとり方に、集団適応の具体的な姿をとらえることができるように思われます。またこの「動物あそび」は、子どもたち一人一人の特性（性格、遊びの経験の豊かさ、友達関係など）が浮きぼりにされやすい活動であると思われるます。たとえば表4のE、Sは共によくこの活動をしています。Eは友達もたくさんいて相互によくかかわり合っています。Sは一人で活動したり、他の子から働きかけられて初めて反応するというようです。今後は、「動物あそび」における個人差に注目し、このように異なった発達をもたらす諸要因を検討していく必要があると思えます。

(横浜学園付属元町幼稚園)

倉橋惣三先生の御遺族の寄附を基に、倉橋賞が定められ、日本保育学会の大会において初めて授与をみたのは、昭和三十一年のことであつたといひます。爾來毎年の学会研究発表の中で、秀でてゐると見なされた研究が、幾許かの賞金を附せられ、受賞の榮で称えられてきました。この倉橋賞が、来年度からは、日本保育学会研究奨励賞と名を変えることになりました。故山下俊郎先生の御遺族からの寄附を受け、二つの基金に因つてたつて研究奨励賞が制定されたのです。倉橋賞の名が消えることに對し、一抹の寂念を禁じ得ないのは、本誌に深くかかわつてゐるゆゑでしようか。倉橋賞と山下賞の二つの賞を設け、それぞれに異なる質の、共に卓抜した研究を精選してほしかつたと、或る人が身近く呟いた声が耳に残ります。

さて、本号より、最後の倉橋賞受賞者の研究が続いて掲載されます。本号をも

つて掲載が終了するのは、仁科弥生氏の「エリックソンと幼児教育」。E・H・エリックソンの『幼児期と社会』をはじめとする一連の論考を、二十回に亘つて紹介いただいたものです。仁科氏のこれからの御研究は、日本の女性の自我の発達を高群逸枝など個々の人物のライフヒストリーを追ひながら続けられていく御予定だそうです。

津守真先生の連載が始まりました。愛育養護学校に引つ越された先生は、その爽やかな心映えを「朝に思う」と題して寄せて下さいました。昭和十三年にわが国最初の知恵おくれの幼児保育室が、愛育研究所の中に開設され現在に至つていますが、今、財政的に困難な立場にゆきあたり、関係者が結集して「愛育養護学校後援会」を、この七月、発足させました。養護学校を長く見守つていただいたという呼びかけが、一人でも多くの方々に届くことが念じられます。(美)

幼児の教育 第八十二卷 第十号

十月号 ©

定価三〇〇円

昭和五十八年 九月二十五日 印刷
昭和五十八年 十月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

●本紙御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

好評発売中!!

保育の再点検 (全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きつと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

A5判・ケース入り・各208頁・セット定価6,750円

近藤充夫 監修
一斉指導で楽しく展開する

幼児の運動 (全3巻)

近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 共著

- 1、大型遊具を使って
- 2、小型遊具を使って
- 3、かけっこ・プール
・運動会

一斉活動でのびのび育つ幼児の運動遊び集大成。保育を楽しくする画期的な全3巻です!

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐにわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせて、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にしてあるのが、本書の特徴です。

B5判・各200頁・定価各1,800円・セット定価5,400円

新刊!

こゆびどうわ (1) (2)

東 君平・著
A5変形判・上製本・(1)(2)とも各72頁
定価(1)・(2)とも各900円

赤ちゃんのこゆびの ように短くてかわいいお話集。

ふだんのさり気ない暮らしの中のできごとを、子どもの心とおとなの視線をまじえて、独特な絵とともに描いた東君平の短い短いお話集。

すべて書きおろしの32篇がそれぞれの巻に収録されています。

保育の中で子どもにお話をねだられたとき、先生が一人で味わいたいとき、そして親子で読書をしたいとき、それぞれに楽しめるお話集です。

東 君平——独特な絵と文で、毎日新聞の「おはようどうわ」をはじめ、童話や絵本の分野で活躍中。